ISSN 0910-3090

國語國字

國語問題協議會報
平成二十七年十一月一日 發行

第二〇四號

目次

第九十六回　講演會（平成二十七年六月十三日）

平成の文藝復興　小川榮太郎　1

皇后陛下美智子様の御歌　竹本　忠雄　13

寄稿

漢字以前の日本の文字　安田　倫子　27

契沖顯彰短歌大會　吉原　榮德　35

縱書きの意識と感覺（その七）　若井　勳夫　47

日本文藝復興の提唱（二）　市川　浩　51

言葉の文とり　谷田貝常夫　54

日中英、言葉の雜學（十）　高田　友　59

平成四十五年　高崎　一郎　63

「鍛冶（たんや）」を「かぢ」と讀むの理　高田　友　65

和歌・奈良の旅　安東　路翠　69

後書　谷田貝常夫　72

題字・插畫　近藤祐康

國語問題協議會の電網 URL　http://kokugomondaikyo.net

第九十七回國語講演會　平成二十七年六月三十日　於日本倶樂部

平成の文藝復興

小川榮太郎

みなさん。小川榮太郎です。こんにちは。

本日は、私の敬愛する竹本忠雄先生とご一緒の日にお招きいただき、大變光榮に思つてをります。

さて、今日の私の題目は、「平成の文藝復興」といふことですが、私は福田恆存先生に若い頃非常に影響を受けました。福田先生から教はつた一番大きなことは何かなと思ひますと、これははつきりしてゐる。理想といふ次元と現實といふ次元を絶對混同しないこと。政治と文學を混同しないこと。これに盡きます。

「一匹と九十九匹と　ひとつの反時代的考察」といふ福田先生の大變有名な論文があります。政治は九十九匹の羊を救ふ。そして、政治が救ひ切れない stray sheep、懷める仔羊が一匹である。必ず政治から、あるいは現實からはみ出してしまふ部分、そこに固執することこそが文化であり、文學であり、思想なんだといふ考へ方ですね。惡しき政治といふのは、九十九匹を救へない。三十匹とか二十匹しか救へない。

では、惡しき文學、惡しき文化は何かといへば、この惡い政治が救へない事に乘じて、中途半端に色氣を出して、中途半端に政治に手を出す。政治に徹しきれないのに、なんとなく政治と關與するやうな、さういふ文化人のあり方を福田先生は非常に批判されたと思つてをります。

福田先生がこれを書いたのは昭和二十三年前後と思ひます。あのころは左翼運動の猖獗をきはめた時代ですが、今の安保法制論議でも、まだ、現實に絶對對處できないやうな議論を、朝日新聞を始めとして、あちら側の憲法學者たちはみんな振り回してゐますから、六十年經つても、全く變らないわけです。

政治が量の世界で、四十匹救へる、五十匹救へる。その數を九十匹まで持つて行くのが政治の使命です。しかし、文學は一匹。政治は九十九匹で文學が一匹だと九十九分の一の價値しか文學にはないのか。さういふ話ではないわけでありまして、この一匹の中に無限の奥行きがある。つまり、私（わたくし）といふたつた一人の、たつた一個の世界を掘り下げて行くとそこには魂の世界、美の世界が無限に廣がつて行く。文學はそれに固執すべきで、文學をやるときに、政治や商賣、あるいは、木の

青れ行きや名聲、さういふものを氣にしてゐたら、文學にはならない。純度の高い精神の領域を守らなければいけない。私は骨身にしみてこの原則を重大な信念にしてゐます。

一方、私は政治にかかはるときには、九十九匹をどう救ふかといふ政治的なリアリズムに徹する。文學者面は絶對にしない。政治家と密談をすれば、最近のどんな政治家よりも悪辣な陰謀を私は企みます。そのかはり私の本當の住處は一匹の世界であります。文學、魂の世界です。本當はその問題だけに專念をしたいのです。なぜ專念できないのか。あまりにも政治的に深刻な危機、最後の崖つぷちに日本が立つてゐる。放置して置くことがちよつともうできない狀況だからです。

崖つぷちで登場したのが第二次安倍政權です。私自身は安倍政權登場に際して、だいたい二年くらゐ前から、生活も何も全部拋り投げて安倍再登板に命を賭けました。私の書いた『國家の命運』といふ本に、政權誕生の內幕を書きました。とにかく、奇蹟のやうに安倍政權が誕生して、そして今總理の御指導力で、日本の國力が俄かに復活した。景氣や經濟、國民の元氣が全然違ふ。景氣が實感できないと云ふ人がゐますが、政權が變つて、瞬間に景氣のよさが實感できるなんて、世の中にあるんですか、そんなもの。高度成長の頃、十年で倍增ですが、日本人が一番見た映畫は何ですか。「寅さん」です。寅さんを皆さん見て下さい。毎回タコ社長が青色吐息で首をくくらうと騷ぎ立てる話、高度成長期にね。要するに景氣なんてものはみんなが瞬時に體感できるものではないのです。今の狀況はどうかといへば、私なんかは、仕事の關係で夜、人に會ふことが多いですが、安倍政權發足以來、夜の巷の人出は激增してゐます。安倍政權が始まつて半年くらゐまでは、私が政權と比較的近いと思つてゐる飲食屋の人から「政權交代したけど、全然お客殖えないぢやない。なんとかしてよ。總理に言つてよ」なんて言はれました。最近は言はれません。お客さんいつぱいですから。二年半でここまで變へる總理はさうさうゐませんでせう。

國際社會においても、サミットでも、日本の總理が議論を引つ張つてゐる。日本のテレビはほとんど報道しませんけど。

でも、これは幻想なんです。安倍總理が一人で作り出してゐる世界なんです。この瞬間にもし安倍總理がおやめになつたらどうなりますか。憲政の常道で、野黨第一黨の民主黨の岡田總理大臣になつたら、どうなりますか。ちよつと想像していただきたい。これはまじめに想像しなければいけません。なぜかといふに、二年半前まであの人たちが政權についてゐたのが、夢でも幻でもなくて、現實なんです。ぢやあ、明日現實にならない保證はないぢやないですか。我々は、あるいは日本人一般は忘れつぽすぎるのです。今岡田さんといふ名前を出しましたけれども、これはもちろん、今日この瞬間に起ることはありえません。ぢやあ、自民黨政權で石破總理大臣ならあり得ますね。どうですか。あるいは、石原伸晃總理大臣を想像してみて下さい。幹事長谷垣さんですね。安倍さんに何かあつたら谷垣總理大臣になる。谷垣總理大臣で、株價は保持されますか。空前の賃上げが今毎年續いてゐる。高度成長期よりも賃上げ率が高い會社がたくさんある。これ、どうなりますか。中國や朝鮮、對日態度はどうなりますか。ロシアはどう出てきますか。G7に行つて、石原氏や谷垣氏が安倍さん竝の指導力を發揮できるでせうか。ぶつたたかれ續けても、平然と安全保障政策を進めるといふことが、石破さんや谷垣總理大臣にできるとお思ひでせうか。つまり、今の日本の強さと安定は、安倍晉三總理が一人で保つてゐるんです。高度な近代國家にあるまじき狀況ですけれども、現實にさういふ狀況が續いてゐる。そして、安倍總理はもちろん永遠ではありません。やめるときが來るのです。その後どうするか。文藝復興といふ題ですけど、申し譯ないのですが、かういふことが本當に重なつてゐて、私は今何をやつてゐるかといへば、憲法九條第二項改正運動の民間側の陣頭に立つてゐます。なんで私が陣頭に立つかといへば、ほかに立つ人が餘りにも少いからです。議員バッジつけてゐる人にも、本氣の人は大變少い。

安倍政權が誕生したときには、おなかが痛くてやめちやつたとみんなから言はれて、誰も再登板なんて本氣で思つてはゐなかつた。だから、私のやうな無力の民間人が應援する意味があつた、でも、最高權力者になつたら、まはりに、優秀な官僚がたくさんゐて、國會議員は、みんな安倍さんの側近たちが權力を握つたんですよ。そしたら、民間の私が何かやる必要はない。私はさう思つてゐました。ところが、私の忙しいこと……。二年半、いつたい自民黨の人たちは何をやつてゐるんだらうなと、私は最近、本當に腹が立つてきた。

特定機密法でも、集團的自衛權でも今回の安保法制で

も、安倍總理が引つ張つた。打つ叩きに打つ叩かれても、ぶれなかつた。その都度、一〇%から一五%支持率を下げてゐます。自民黨は廣報活動をしたのか。してゐない。チラシ一枚作らない。共産黨は毎週チラシが入つてゐますよ。戰爭のできる國になる。今でもよく入れてくるでせう。自民黨から、これで平和が守れるんですといふチラシを一枚でも受け取つた人がゐますか。いつたい何をやつてゐるんだらうな。最初のうちは、穏やかに進言してゐたが、だんだん本當に腹が立つてきた。腹が立つだけではしやうがないから、結局私が動いてゐるわけです。

自民黨の安全保障部會では一生懸命やつてゐる。だけれども、黨一丸でメッセージを國民に届ける努力を全くしてゐないわけです。で、私のやうな民間人が抛つておけなくなる。

私は危機と呼ぶのは本來嫌ひなのです。危機を呼號するビジネスがあるわけです。なんとかが危ないとか言へば、本がちよつと賣れますからね。

さういふのは嫌ひなので、危機を強調するといふつもりで今もお話してゐるのではない。しかし、今呑氣に構へてゐては、我國の命運が盡きてしまふ狀況が來てゐるのは間違ひありません。中國の指導者がどう見てゐるかと想像するに、もう、安倍政權が續いてゐる間は適當にしておけばいいのです。安倍さんの後、日本の政權がどうせ弱腰になり、どうせ日本の國力は落ちますから、さうなつたときに一氣に片付ければよい。さういふつもりでゐるだらうと想定できます。

だから、今のうちに憲法九條二項改正による自衛權確保を本當に國民投票で票が取れる狀況に載せないといけない。そのシナリオを誰が書いてゐるのですか。憲法改正といふのはマーケティングです。八千萬人が投票するとして、四千萬人に丸を書いてもらはなければならない。四千萬人をターゲットにした戰略なんて、トヨタだつて日産だつて持つたことないのです。それをやらなければいけないのに、自民黨がやつてゐない。誰もやつてゐない。やる人がゐなければ、誰かがやらなければいけない。だから、本當は文藝復興の話を全部六十分やりたかつたのですが、お話前半、この一匹ぢやなくて、九十九匹が本當に大變だといふ話をさせていただきました。

で、ここからが本來の話です。今言つた政治的な日本が大變なことになつてゐるのですが、いくら政治的な日本を守つても、文化的な日本が崩壞したら、これは話になりません。そして、問題なのは、文化的な日本が、あ

る面では政治的日本以上に風前の灯火になつてゐる。政治と文學、兩方ががたがたになつてゐるといふことは、本當にいやな話で大變申し譯ないのですが、表面的には世界の大國であり、經濟大國であり、そして、安倍さんのおかげで今政治大國にも見えてきてゐますけれども、土臺がシロアリに食はれてゐるのが、殘念ながら日本の今の實狀だと思ひます。國といふものはある日突然消えるんです。たとへば、二十世紀後半、超大國と言はれた蘇聯が今ないわけでせう。もちろん、あれは最後に經濟ががたがたになつて亡んだ。國力は經濟ですから、經濟がガタガタになると先が見えて來る。その意味で、今日本が急に全部消えてしまふことはもちろんないですよ。でも、國といふものは油斷してゐると消えてしまふものだといふ意識は持たなければいけない。文化といふのもなんとかなるだらうとみんなが思つてゐると、本當に消えてしまふものなのです。

そして、日本の文學、記紀萬葉からずつと續いてゐた日本文學の山脈は、今昭和の終焉とともに、大變嚴しい狀況になつてゐるのではないでせうか。平成になつて、日本の文學狀況がよくなるといふ豫感はまつたく今の所してをりません。ドナルド・キーンさんが、日本文學史といふのは、一國文學史としては世界でも冠たるもの、有數なものであると云つてゐる。私もさう思ひます。萬葉集に採用されてゐる初期の歌謠から取ればおそらく千五百年、その間途切れず、日本文學は美しい山脈を成し續けて來た。萬葉集の後、あの雄渾さは消えて古今集・新古今集においては、バリエーションを重ねて細いものにはなりましたけれども、高さそのものはほとんど失はれてゐない。それが昭和迄途切れなかつた。

七十年前、日本の若者たちは大東亞戰爭で次々に散華して行つた。その方たちの遺書を讀むと、まあ、皆さんも、いろんな機會に繰り返しお讀みになられたことでせうが、涙なくして讀むことはできません。多くの人が、萬葉からあららぎ、折口、小林、川端を讀んで、そして、特攻機に搭乘し、あるいは、南洋の苛酷窮まるジャングルの中で戰死して行く。その彼らが殘した言葉といふのは文學ならざる文學、日本の一大文學であり、一大神話であると私は思ひます。

この英靈の遺言、なんでこんなに胸を打つのかといふと、もちろん、その戰闘が苛烈であり、そして、彼らの國を思ふ思ひが、純粋であるからですが、同時にそれは、日本の巨大な文學傳統のなかに、國民全部がすつぽり包

まれてゐたからです。だからこそ、あの戰地で、文學とかかはりのない彼らの言葉が、あんなに輝くのです。これを文學現象と切り離して、單にああいふ事實だけが、激しい戰鬪といふ事實があつたといふだけでは、あんなに美しい言葉が無數に生れるといふことはありえません。

そして、それはもちろん昭和までの文學史と照應し合つてゐます。たとへば、昭和四十年前後にどんな文學者がゐたか。たつた五十年前です。永井荷風、正宗白鳥は三十年代、まだ生きてゐました。谷崎潤一郎、志賀直哉、柳田國男、里見弴、佐藤春夫、あるいは、昭和文學の川端康成、三好達治、中野重治、野上彌生子、石川淳、永井龍男、あるいは戰後派の大岡昇平、遠藤周作、安部公房、それぞれ好き嫌ひの評價はいろいろあるでせうけれども。

そして、曾野綾子さん、石原愼太郎さん。あるいは大江健三郎さん。政治的には惡質ですが、初期の作品にはやつぱり天才があります。

大衆文學も、吉川英治や江戸川亂步、横溝正史、山本周五郎、海音寺潮五郎、司馬遼太郎、池波正太郎。いろいろと名前が擧つてきます。いま推理小說は日本でものすごく盛んですが、所謂トリックのゲームになつてゐる。文學ではなくなつてゐる。でも、例へば松本清張の小說を讀むとその時代の空氣がぷーんと香つてくる。あの香つてくる空氣の方が文學なのです。

なにしろ、今擧げた曾野さんとか石原愼太郎さんがデビューしたときにまだ正宗白鳥なんか存命だつたのです。それが今どうなつてゐるのかといふ話ですね。

私、ある時、自分が生れた昭和四十二年に發表された文學作品と、たとへば近年のある一年の間に書かれた文學作品を竝べて、どのくらゐこの間に文學の推移の差が生じてしまつたかといふ論文を書かうと準備したんですが、やめちやつたことがあります。

平成の作品を引用するだけで、批評作品にならないのが解つたので、やめたのです。

私自身も現役の物書きですから、昔がよかつたと言つてゐるのではないのです。基本的に私は昔はよかつたといふ言ひ方は嫌ひです。自分自身いい仕事をやりたいわけですから、昔はよかったけど、今もいい、こんな面白い奴がこの時代にはゐるよ、と言ひたくてしやうがないのです。しかし、譽めたくても、どうにもかうにも……。

さて、こんな狀況下で、國家としてできることは、國

語教育の再構築ですね。これについては何年も前に七八年前に出た水村美苗さんの『日本語が滅びるとき』といふ本があります。最近文庫になりました。

安倍政權は教育に熱心なのですから、なんとかここに書いてある方針を採用して欲しいと思つてゐるんですけれども、彼女がここで言つてゐるのは、戰後の國語教育には本當に間違つたことがある、本來の國語教育といふのは、讀まれるべき言葉をきちんと讀ませて行く事であるはずなのに、戰後の日本の國語教育は逆だといふのです。みんなが文章を書けるといふことに目標を設定してしまつたために、讀む力が七十年間を通じてどんどん落ちてきた。これはなにも、左翼イデオロギーの問題ではない。單純な話です。讀む力がなくなると、何が讀めなくなるかといふと、勿論、記紀萬葉や源氏平家が讀めない。漱石・鷗外が讀めない。谷崎、川端も、小林秀雄・福田恆存も讀めない。

でも、マルクスも讀めなくなります。フェミニズムの本だつて讀めないのです。それから、平等理論を書いた理論書だつて、今のやうな平等教育を受けたら、讀めなくなる。つまり右とか左とか關係なしにみんなが馬鹿になるのです。

最近の人は、一流企業や官廳のエリートを含めて三十代から五十代の人たちでさへ、さう難しくない文章を音讀させると、大抵、ずい分ひどく閊へます。これはやつぱり凄い話だと思ひますね。十代とか、ゆとり世代とかぢやなくて、非常に全體に落ちてゐると思ひます。

だから、國民全體の國語力を復活させないと、いろんな高說、高いレベルの說を幾ら語つても、どうしやうもないといふギャップが生じてゐます。國語問題はもうそこまで來てゐるのです。國語教育再建は大急務です。

それから、もう一つ。出版文化の大きな失敗であります。高度成長期、日本は大衆文化狀況に入ります。そのとき、我國の文化といふのは大きな大きな失敗をしたのです。何かといひますと、大衆文化、商業出版、これは否定しても仕方がない。商賣といふのは、ちやんとやる、それは當然のことです。けれどもそのときに質をどうするか、マーケティングと質を兩立させないといけない。ところが昭和四十年代から今日にかけて、商業主義まつしぐらで、質といふことは完全においてけぼりになつてしまつた。賣れることイコール價値になつてしまつた。原因は複雜です。

長い間、近代に入つても、文學といふのは全然名譽な

仕事でもなんでもなかつたのです。文學者なんて名士でも何でもなかつた。その上、儲からなかつたのです。で、其の間、たとへば、文藝春秋などは、菊池寛が文學者が飢死にすると大變だから作つたわけでしょ。簡單に言へば。そのくらゐ、文學をやるといふことは、人生を棄ててかかるやうな話だつたのです。

さういふ時代に、純文學にしても、大衆文學にしても、食へなくてもいいからやりたいといふ人たちが、一心不亂に腕を磨いてきた。これが日本近代の文學の榮光だつたのです。もちろん、食へないと困ります。だから、みんな困つてゐたわけです。その中で困つてもともかく諦めないで腕を磨いてゐた。いはば、無償の情熱が前提なのです。

みんなそれぞれにいろんな思ひをしながら、文學に固執したのは、文學賞が欲しいから、有名になりたいから、ではなかつた。

さういふ人たちが大量に最盛期を迎へたのが、ちやうど昭和二十年代から四十年代。そのときに、第二次大戰が終り、日本の百年戰爭がある意味で強制終了されて、エリートたちが軍人になつた時代から、あるいは軍人が憧れであつた時代から、文學と言ふものが突然、社會の中できらきらと輝かしいものになつたのですね。もてはやされて、そして同時にほかに娯樂がなかつたので、本がものすごく賣れた。作れば賣れる時代に大衆文學も純文學も、最高に質のいい作家たちが五十人や百人單位でゐたわけです。書けば賣れる。賣れれば儲かる。出版社がどんどん社屋を建てて、不動産をやつたり、株をやつたりして、大企業になり、文士は名士になつた。

で、みんな忘れちやつた、人事なことをね。それは何かといへば、これだけ文化が興隆するといふことは、食ふも食はずもない、ひたすら文學に固執した貧乏時代を潛り抜けた彼らの無償の情熱が、その後の出版文化の高揚を支へてゐた、そのことを忘れてしまつた。後繼者を眞劍に育てなかつた。氣がついたときは大きなビルだけが殘つた。會社のづうたいの大きさだけが殘つた。一流の文士はどんどん死んで消えて行く。でも大きくなつた會社を小さくすることは非常に難しいわけですね。さうすると何が起るかといへば、ともかく會社の規模を回さなくてはいけない。社員を食はせてゆかなければならない。

谷崎、三島由紀夫、池波正太郎の足元に及ばない、平凡で下手くそな作家たちを、平成始まつて以來の衝擊作、

衝擊デビューなんて言ひながら、無理矢理業界のスターを作つて行く。

そんなことを續けて行くと、本當に本の好きな人が新刊を讀まなくなる。新しい作家を追ひ驅けなくなる。中に、本物の作家が新しい人の中にゐても、消えて行つてしまふ。きつとさういふ才能がこの何十年間かにたくさんゐたんぢやないでせうかね。さうして、質の空洞化が進行を續けた。

文化といふのはピラミッドの頂點を繼いで行かなければ破綻する世界なのです。

私は專門がクラシック音樂ですから、比較しますと、日本のクラシック音樂は今盛んです。平成になつて水準が上がつてゐる。何故かといへば、國際市場があるからです。國内だけだつたら、タレント業界化してガタガタになつて、日本のクラシックは崩壞したでせう。

スポーツも同じでしょ。悔しいけど、國際社會が質を擔保してくれてゐるから、頑張つて日本にも才能が開花したのではないですか。

ヨーロッパのクラシック音樂といふのは、全然才能が落ちてゐません。百年前に比べると個性豊な人は減つてゐます。が、しかし、今でも凄い人が何人もゐます。その前にワグナー、モーツァルト、バッハといふ、使つても使つても償却できないものすごい高い價値がある。ピラミッドを最初に作つちやふと、何百年かその文化はもつのです。日本で一番解りやすいのは歌舞伎です。江戸時代にできて、その後も洗練され續けてゐます。

私も、昔、知り合ひが先代の海老藏の付き人だつた人が、今の海老藏がデビューしたころ言つてゐました。顔は似てるが、目が全然違ふ、あの目ぢやだめ、とね。何しろこの方と話してゐると、昭和七年のなんとかといふ舞臺で當時の何代目の誰それが、といふ話が始まるのです。

かういふものがピラミッドの白覺化です。では日本の文壇に、今、作家が何か書いたつて、鷗外先生の前で恥かしいと云ふ感覺はありますか。ありません。恥かしい仕事をし合つて、芥川賞だ、川端賞だ、三島賞だと回しつこして、みんなで疵を舐め合ひ續けた。さういふことが續くと、文化といふのはどんどんころげおちて行く。

ぢやあ、どうしたらよいかと言つた時に、私は出版界を獨裁する金も力もありませんから、とりあへず個人プレーしかできません。

まづ個人が何かをやらなければならない。

こだはりのある小さな出版社がこの十年の間にどんどん消えて行きましたけれども、なんとか愛國心がある中小企業のオーナーさんや、あるいはお金を持つてゐる人がゐるなら、ちよつとさういふこだはつてゐる出版社に何か資本を投入するなり、企業と結びつけるやうな工夫をしていただきたいと私は思つてゐます。私自身もさういふ人たちと付き合はないと駄目だなと思ひまして、經濟的な人たちと、文化人を支へられるやうな事業を起して欲しいといふ話をし始めてゐます。

もう一つは、これが一番大事なことですが、自分自身が文章を書いて、今の時代に自分の仕事で質を確保して行くといふことしか、物書きとしてはないわけです。

そこで、今日はちよつと、私の、これから出す本のコマーシャルをさせていただきたいと思ひます。もちろん、コマーシャルといふのは眞面目な意味ですよ。私は政治的な本ばかりを出してゐて、私の名前は安倍總理の名前と關聯附けて記憶されてゐる。しかし、そろそろ本當に文士としての本業に戻りたいと思つてゐます。

七月の下旬に、昭和の戰爭についての本を出しました。『一氣に讀める「戰爭」の昭和史』です。戰後七十年といふことで、支那事變から終戰までの九年の過程を分りやすく追つてゐる本があまりないのです。で、通史の多くは、いはゆる東京裁判史觀に乘つ取られてゐる。今一番讀まれる通史は半藤一利さん。文藝春秋も白虐史觀に乘つ取られてしまつた。それから、保坂正康さん。あのあたりの人の通史が一番賣れてゐる。さういふ意味で、それを置きかへる通史を書かうとしたのが今回の本です。

もう一つは文藝評論集です。『小林秀雄の後の二十一章』と題して幻冬舎から出しました。

題の意味するところは、小林秀雄の後、文藝評論といふものを改めて平成二十七年の今日繼ぐ、さういふことを宣言するといふ意味です。ドン・キホーテだと言はれても、おまへ全然なつちやないと言はれても、それは本望であるわけでして、誰かが若い世代で、聲に出して、何か動きを作らなければどうしやうもない。そこで、あへて小林秀雄の後繼を僭稱する厚かましさで動きを作らうと考へました。分厚い本です。五百ページを越えます。

大觀をあしらつた派な裝丁の箱入りで、正漢字、正假名遣ひです。出版社は幻冬舎です。幻冬舎といふのは、ベストセラーを作る有名な會社で、正統表記の本を出したことがありません。

ですから、千字を越える正字を全部コンピュータグラフィックで作つてくれました。なにしろ、今、正漢字の出版は、今日來てをられる小堀先生以外はもうないでせう。

これから出る新・谷崎全集、あるいは既出の新・三島全集も、漱石全集も、正漢字がもう軒並み消えてゐます。その文化自體が終りを告げようとしてゐるんです。

口次を見ていただきますとお分りの通り、國體論から文藝的なもの、あるいは、音樂、繪まで廣く論じました。ルソーの『告白』なんか、これ、實は褒めてゐるんです。まだ論としては途中です。といふことは、かういふ天才が同時に、社會契約論を書いて、大變な毒をその後世界史に撒き散らしたのは、どういふ譯だらうといふ謎を私は出したのです。要するにヨーロッパの近代といふ時代は、ある意味で人類の文化のある種の最高峰、少なくとも私は大變な影響を受け、大變心醉してゐます。

それは音樂でいへば、ベートーヴェンからワグナー、シュトラウス、フルトヴェングラー、と續く系譜です。同時にこの文化には物凄い毒があつて、そして、短期にものすごい輝かしいものを出すかはりに、人類を根こそぎ駄目にしてしまふやうな性質も内藏してゐます。

一方、本書の中で、國語論として『日本語といふ鬼の偉さうな男たち』といふ八十頁くらゐの作品を入れました。ここで、實はさきほどお話した水村美苗さんの本を素材に、文藝評論的な面と國語教育論とをつないでみました。

制作上のことで言ひますと、私が一番苦しんだのは、實は現役の作家の平野啓一郎さんの『決壞』といふ小説です。文壇に出るには、現代小説を論じないと駄目だよと言はれて、勸められて平野さんの作品を論じたのですが、文章が本當にどうにもかうにも……。六十代から上の人になると文章はからうじて書けてゐる人が多いんですが、四十代以下になると本當に文章がひどいですねェ。書き終つたときに半分ノイローゼになりました。

最後に、全體を通してみますと、ささやかな作品ですけれども、十年以上かかつて、その間約三年くらゐ政治に完全にかかりづめだつたときは、何もやつてゐませんから、正味七年ですけれども、私としては、この仕事で、文化をきちつとやる。そして、若い世代の人が私以上の仕事をバンバン始めてもらふ。出版社にもかういふことをやる氣になればなんとかやれると思つてもらふ。

そんな意味を込めて出した本なので、なんとかこれ、自分のためといふよりちよつと喜れて欲しいのです。あ、

かういふものが齎れるんだ。さうすると、他の出版社も、文化事業の中で、若い人にかういふ仕事をさせるといふ可能性に目覺めるかもしれない。

私自身はこのあと歴史、とくに歴史と神話の境目のあたりをじつくり考へたい。それともう一つは、まさに日本が問はれてゐる戦後の安全と平和。「戦争とは何だらう」といふことですね。トルストイの『戦争と平和』は、全編に亙つて、一種必然の力だといふ以外全然何も言つてゐないのですけれども、戦争とは何かといふ問に對して、八十年間戦争を續けて、今度は、銃を持つと憲法違反かどうかといふことを七十年間議論するといふ、この極端な運命を歩んだ日本民族として、戦争と平和を深く考へるやうな仕事を次にやりたいと思つてゐます。

御静聴ありがたうございました。

散らかつた話で恐縮です。

（をがは　ゑいたらう　文藝評論家）

講演會　平成二十一年六月十三日　於日本倶樂部

宮后陛下美智子様の御歌

竹本忠雄

ただいま私を御紹介くださつた國語問題協議會の谷田貝事務局長は、都立第三中學校（現両國高校）で私と同學でした。

都立三中は、芥川龍之介はじめ錚々たる文學者が輩出した母校でして、私も在學中はその後に續けといふふうな青臭い文學活動をやつてをりました。當時、谷田貝さんは鎌倉に住んでいらつしやつて、私ども東京の下町の陋巷で暮してゐた者の眼から見ますと、とても眩しく見えたものです。もう一人、林暢さんといふ天才的な方と親友で、二人ともフランス語もすでにやつていらした。私なんかその眞似をして始めたやうなものです。そして、このフランス語を始めたことで、自分の人生は變つてしまつた。

また、先程は小川榮太郎さんの御講演がありましたが、實踐活動に根ざしたこの文藝評論家とも、私はやはり異なる縁がございます。もうをとしとし十二月になるかと思ひますが、「安倍晉三氏を總理にする文化人の緊急集會」に出て來てくれと電話がかかつてきまして、駆けつけました。そして、實際に小川さんは、安倍さんを總理にするといふ誓ひといふか、それを實踐してしまはれたわけで、大したものだと思つてをります。

先ほどの御講演にも、斷崖の危機に立つ日本と言はれてゐましたが、私はよく戦後のフランスもそんなふうだつたと思ひ出します。ベトナム戦争とアルジェリア戦争といふ二つの大戦争をかかへて、「フランス病」といふ名前で呼ばれてゐました。ド・ゴールは、いつたん政權を取つたものの、約一年間で野に下り、フランスはもうどうにもしやうがない。フランス人でさへ、みんなさう思つてゐました。

安倍さんが登場するまでの日本も慘澹たるものでしたが、當時のフランスはもつとずつとひどかつた。さういふときに、ド・ゴールが返り咲き、マルローを文化大臣に据ゑて、第一次ド・ゴール内閣のときは、情報大臣でしたが、次は文化大臣、そして、十年間政權を維持して「大國」フランスを復活させたわけです。ド・ゴール大統領は原爆第一號の實驗をサハラ砂漠で成功させ、「今日からフランスは大國になつた」と宣言して、核アレルギーの日本を大いに憤慨せしめました。アメリカも「同盟國にあるまじき行爲」として批難しましたが、ド・ゴールは「同盟國なればこそ」と

應酬し、NATOからは獨立して、その後、蘇聯（ロシア）に對峙し、いまやドイツと並んでEUの盟主となり、「同盟國」から感謝される存在となつてをります。

フランスは斯くあるべしといふ、若きシャルル・ド・ゴールが書いた『自刃』（別譯『劍の刃』といふ名著があります。アンドレ・マルローに言はせますと、「自分自身の將來の出現の豫告をした書」といふのですが、私は、小川榮太郎さんの「約束の日――安倍晉三試論」を讀んで、これは安倍總理の出現豫告の書と感じたことを覺えてをります。實際に、今の日本は見ちがへるやうになりつつあります。

私は、最初の渡佛後の十一年間はパリを據點に講演活動を主として日本を語り續け、どんな場合にも、精神的に日本を離れたことは一度もなかつたつもりだつたのですが、その後、ド・ゴール―マルロー時代が過ぎるやフランスは一變し、「反日」の風潮が激化する樣相を見て内的に大打擊を蒙りました。

特に二〇〇一年の「九・一一」全米テロの時に、フランスの左傾代表紙「ル・モンド」が、イスラム・テロリストではなく、日本の特攻を誘下する社說を掲げてゐるのを見まして、もう駄目だと思ひました。そこで日本よ目覺めよといふ憂國活動に入つて――その間に筑波大學で教壇に立ちましたが――日本中で講演活動をして周りました。そのやうな時に、たまたま新聞に載つた皇后陛下美智子樣の

語らざる悲しみもてる人あらむ
母国（ぼこく）は青き梅実る頃

――旅の日に――

といふ御歌を拜しまして、電擊に打たれたやうになつたのです。美智子樣とはかういふ御感情をお持ちの方なのかと思ひまして――。

申すまでもなく、この御歌のきつかけになつたのは、ロンドンで兩陛下がお遭ひになつた「元イギリス人捕虜」による不敬行爲です。それにしても、なぜ私がこの御歌にさうまで感じたかと申しますと、それまで美智子樣の和歌はたいへんに美しいものであり、美智子樣は抒情歌人として、本當に一流の方であると思つてをりましたところ、表面には出ないものの、戰爭といふ一つのシテュエーションを背景として、實に凛乎たる姿勢をお示しになつていらつしやる――そのお姿に心底から感動させられたのであります。

かういふ譬へはどうかと思はれますが、「なんぢ左の頬を打たれなば右の頬をも出せ」といふイエスの言葉をも思ひ、

いうべへばと、反省させられました。これまで自分はこのお方について、世間で傳へられてゐる以上の何を存じあげてゐたのであらう、と――。一九七四年五月に、アンドレ・マルローが、當時まだ皇太子でいらした明仁親王と美智子妃の兩殿下に御親講申しあげたときに私は通譯を拜命して初めてお目にかかつたのですが、そのときには美智子樣は一言も何も仰らなかつた。皇太子殿下が主役の場ですからして、さういふものなんでせうけれども、藝術家でもいらつしやる美智子樣とマルローの間に、もつと自由な會話ができればよかつたのに……と、あとでひそかに思つたりしたものでした。

さらに、もう一つ思ひ出されました。

あるNGO團體で私がバングラデシュ大水害の救援活動を致してをりました時に、そのキャンペーンを、皇太子妃美智子樣が私の編集長をつとめるミニコミを通じてお知りになり、御關心を示してくださつたことがございました。そのあと、宮内廳の憂慮にもかかはらず、兩殿下がバングラデシュを御訪問になり、さらに、「石を投げても行く」と皇太子殿下が仰せられて、御夫妻で未だ怨恨感情の消えない沖繩にまで敢然とお行きになつたと伺つて、いよいよ私の敬仰の念は深まつていつたのでした。

かうして、一年に二度ほど宮内廳から發表されます御歌、また毎年一月の歌會始の儀で披露されます御歌といふ風に徐々に拜してまゐりますと、えも言はれぬ美しい抒情歌、舒景歌の中に、折々、點々として憂國の情の作風のものが混じつてゐるのに注目させられるやうになりました。同時に、御歌の高雅な調べに、おのづと、ここのところはフランス語で言つたら面白いんぢやないか、響きがいいんぢやないかと、ちらちら頭に浮ぶやうになりまして、大それたことですが、これは是非フランス語譯させていただかう、しかし、フランスに行かなければ、よい譯はとてもできないと思ひまして、七十歳の折に古巢のパリに返り咲きました。

そして皇后樣からお許しを戴いて全部で五十三首のお作品を翻譯し終へて、パリのシグナトゥラ社――これはむしろささやかな出版社ですが――刊行させていただいたのが、二〇〇六年（平成十八年）五月でした。出版に至る過程は容易ではなく、宮内記者會からは、出るものかといふ眼で見られてゐましたし、外地でのことゆゑ氣を揉むことおびただしいものがありましたが、侍從長樣、女官長樣はもちろん、皇后樣御自身の直き直きお力添へを忝けなくした結果の幸運でした。

結果は、フランスのみならず、アフリカからも反響が返

つて來ました。御歌に滲み出た厚い慈しみの御心からして、右寄りも左寄りもありません。感動した、泣いたといふ聲が次々と寄せられてきたのです。ルアンダの黑人たち――最も苛酷だつた奴隷の運命の子孫――は、

窓開けつつ聞きゐるニュース南アなる
アパルトヘイト法廢されしとぞ

といふ御歌をある講演會で聞いて、日本のやうに遠い國の皇后樣がなぜ俺たちのことをこんなに氣遣つてくださるんだと、非常な感動につつまれたと言ひます。『ピストリア』といふフランスのポピュラーな雜誌の主幹は、

被爆五十年広島の地に靜かにも
雨降り注ぐ雨の音して

を讀んで、「嘆きなく、憾みなく、涙なし。いや、涙はわれら讀者の眼に溢れざるをえないのだ」と卷頭言に告白してゐます。この人はドミニック・ヴェネール氏と言つて、「極右」といはれてゐましたが、一昨年五月にパリのノートルダム大聖堂内において拳銃自殺をとげました。その名も『西洋のサムライ』といふ一書が死後出版されましたが、その一番眞ん中の章が日本禮讃論に充てられ、そこには右に引用したやうな美智子樣の御歌への讃辭と、三島由紀夫のある言葉の引用が揭げられてゐました。「死は放射能となつて生き續ける」といふ言葉です。しかし、御歌の影響は政治思想の如何に全く關係がありません。弱者へのお勞はりの心が、身障者やハンセン氏病患者への思ひやりを表はした三十一文字の調々にまで滲み出て、これを讀んだ西洋人を廣く感動せしめていつたのです。

『セオト――せせらぎの歌』(Scoto Le chant du gue) と題する御撰歌集の佛譯にかかはらせていただいたお蔭で、それまで見えなかつたことがだんだんと私にも解るやうになつてまゐりました。その一つの大きなことは、このやうです。

それは、大御歌と言ひ、皇后陛下の御歌といひ、時局、政治、歷史といふものには一切關係のない超然たる性質のものである。しかしながら、詠み人である生身(いきみ)の御存在としては、お氣の進まない事をもなされなければならない。たとへば、中國、イギリス、オランダといつた反日思想のかまびすしい國々をも訪問なさらなくてはならない。英・蘭では、先帝陛下昭和天皇がすでにずいぶんと不快な思ひをされて、それを御製に詠ひあげていらつしやいますが、その宿業ともいふべきものを今上兩陛下は承け繼いでをられるわけです。私共民間人はそのやうな不幸な思ひをせずに濟み、喜々として觀光を樂しんでゐられるわけですけれども、聖上のお立場ともなればさうはいかない。それは何かといへば、背後に「歷史」があるといふことです。

歪められた歷史に對しては正しい歷史をといふので、多くの日本人がいま、いはゆる「反日」に對して戰つてゐます。天皇皇后兩陛下は、風下に置かれた私共國民と違つて、日本といふ樹木の一番の高みにあつて一番の強風に當つてをられる。そのお詠みになるポエジーには直接に表はれてゐないやうに見えるものの、やはりよくよく拜しますといふと、そこには至る處にこの風紋が印されてをります。今上陛下の御製には、慰靈といふ形をとるほかには殆ど直接的な風の跡は印されません、しかしながら、美智子樣はある程度歌はれてゐるのです。先に引用いたしました「旅の日に」といふ、英國の元捕虜たちの靑向行爲に對して詠まれた御感懷などがさうです。そして、その意味で、美智子樣は昭和天皇のお嘆きを最もストレートに繼承していらつしやるといふ風にお見受け申しあげるのです。いかなる御姿勢をもつてかといふことを知ることが、この場合、私共にとつて本質的に重要になつてまゐります。

それは、虔みをもつてであると、私は申しあげたいやうに思ふのです。歷史的事象を前に、もろに反應を示すといふことと、次元が異なります。

先帝陛下が、オランダ御訪問の折に、反日的行爲を受けられて、

戰にいたでをうけし諸人の
うらむをおもひ深くつつしむ

とお詠みになつた(昭和四十六年)ことが思ひ出されます。《深くつつしむ》と仰つてゐます。この《つつしむ》は「君子は獨りを慎しむ」といつた感じのそれとは違ふ感じです。「虔しむ」と書かなければならないやうに思はれます。天皇は、歷史的次元で反省される必要はないからです。神を前にしてのみ、虔しむお立場にあるからです。

横文字で言へば、「ピエテ」でありませう。歷史家ミシュレが珠玉の小篇『ジャンヌ・ダルク』の卷頭を「フランス王國の只中にピエテあるを神の見そなはして」と書き始めてゐる、あの「ピエテ=虔しみ」であります。

この姿勢を、美智子様は受け継ぎ、身に付けていらつしやると申しあげねばなりますまい。「皇室は祈り」と美智子様はいみじくも仰いました。といふことは、「歴史」に對する「靈性」の世界に生きていらつしやるといふことにほかなりません。

三島由紀夫は生前、年を追つて深く靈性の世界に入り、最後は「英靈の聲」を書いてゐます。特攻隊員の聲を借りて先帝陛下の「神格化否定」に對する憾みを申しあげてゐる形になつてゐますが、實は、靈性といふ世界に於て陛下の祈りの次元の末端に連なつてゐるといふことを誰が否定できませうか。

三島白刃の報に、明仁親王と美智子妃は芹澤光治良氏をお召しになり、三島の死は政治的なものだつたのか文學的なものだつたかと御下問になつてをられます。「文學的」なものと芹澤氏はお答へ申しあげたとのことです。靈性は文學の領域にあつて、政治の反對側ですから、たしかに間違つた御返答ではありますまい……。

明仁親王殿下は、多年にわたつて御父君の傍らで、默々として、御神事、新嘗祭を嚴修してこられました。それは、侍從長以外にはなんぴとも窺ひ知ることのできない神秘の事柄ですが、美智子様と共著の形でお出しになられた歌集『ともしび』の中にその御感懷を詠はれた「新嘗祭七首」があり、それによつて幽邃なるその光景の一端を拜させていただけるのは洵に有難いきはみと申さねばなりません。

その七首のちやうど眞中に

歌声の調べ高らかになりゆけり
我は見つむる小さきともしび

といふ一首が置かれてゐますが、これは本當の名歌だと思ひますね。新嘗祭を進めていらつしやる陛下のお姿が見えないやうに新嘉殿内はセッティングされてゐて、薄明の中、皇太子に見えるものは小さな紙燭の火だけなんですね。これを《我は見つむる小さきともしび》と詠んでいらつしやる。

この凝視の間に、いはば「天皇」が徐々につくられていく。そして實際に、先帝が崩御され、新帝が即位式を擧げ、その後、最初に行はれる新嘗祭が大嘗祭と呼ばれるわけでして、これはフランスの尊敬すべき宗教學者のピエール・ゴルドンが書いてゐるとほり、「天皇をつくるものは大嘗祭である」といふ、その通りであります。「大嘗祭（おおにへまつり）」の、いはば「新嘗祭（にいなめまつり）」はリハーサルでありまして、これを皇太子は嚴修されたのみならず、その記録の詳細をこれら詠歌の形で残していらつしやるわけです。

で、その間に、いまや傳説と化した美智子様との出遭ひが起つて行くのですが、出遭ひに先立つて、まづ、最初に殿下の祈りがあつたといふことが重要です。このことの意義は非常に大きいので、ぜひともこれに注目せざるをえません。正田美智子様にプロポーズされ、美智子様が大いに迷つてをられたときに、そのお心を決めさせた一言になつたものは、「國事優先、私事後事」といふことだつたといふことの意義が改めて顧みられてくる次第です。美智子様も、入信こそなさいませんでしたが、カトリックの御家庭と學校に育つて、祈りといふものを深く身につけてをられました。お二方とも最初に祈りがあり、それから出逢ひがあつた。虔みと、個人的愛をこえた慈悲心といふものを、それぞれ誰よりも深く體得されてをられたのだと思ひます。

皇后陛下美智子様の單獨御歌集『瀬音』の巻頭第一首、

てのひらに君のせましし桑の實の
その一粒に重みのありて

は、翻譯によつてさへ、多くの人を感動で涙せしめましたが、かうした御慮みなくしては到底詠むことは不可能だつたでありませう。

今生においても實に稀な御二方の出逢ひと申すほかありますまい。そして美智子様の入内された時が昭和天皇の「憂國サイクル」とでもお呼びしたい時期に當つてゐたことも、一つの不思議です。「憂ひ」といふヴォキャブラリーが二度も使はれる御宸憂の期間が十數年間も續いてゐたのです。憂國の至情に、まさに聖上が驅られてをられた。一九七四年（昭和四十九年）は、ちやうど私が十一年間の留學生活を終へてフランスから歸つてきた時に當つてをりますが、その年に二つの記憶すべき御題が詠まれました。一つは昭和天皇のお作品でして、

緣こきしだ類を見れば樂しけど
世をし思へばうれひふかしも

と、これが「憂國」の群詠の始めだと思ひます。そのときに、このはうは世間からあまり注目されなかつたやうですが、同じ年に詠まれた美智子妃の御歌もたいそう意味ふかく思はれるのです。それは、

鹿子(かこ)じものただ一人子を捧げしと
護國神社に語るほはも

たつた一人の愛し子を國のために捧げました――悔いはありませぬ――と母御の語られることよ、と、お心を動かしていらつしやるわけですが、それまで抒情的な光景や御心情を主に詠んだりなさつてこられた中にあつて、まつたく異質のやうなこの御歌がぽんと出てくるのですね。何かが美智子様の中に變化を起したのではなからうかと思はれます。それが何であるかは分りません。ただ、昭和天皇の「憂ひ」をじつと見ておいでになつたであらうと拜されます。右の御製の下の句、《……うれひふかしも》と、御歌の《……語る母はも》は、共に詠嘆の助詞「も」で終つてゐることに氣づかされます。私は、これを、靈性的次元における共振――といふふうに見てをります。

そして、そのことは、三年後に「海」といふ御歌を詠まれたときに、なほはつきりいたしました。昭和六十一年(一九七六年)一月の歌會始で翌年の御題「海」が發表せられ、翌年一月、歌會始で披講された御歌でして、これまた非常に有名な、

岬みな海照らさむと点(とも)るとき
弓なして明(あか)るこの国ならむ

といふお作品です。渡邊侍從長が一番好きな歌だと仰つてゐました。「弓なして」といふヴィジョンがまづ素晴らしい。日本列島を「空滿つ大和の國」、「あきつ(蜻蛉)島」といふのはありますけれども、「弓なして」といふ捉へ方はほかにはないのではありますまいか。

それにしましても、まことに、歌會始とは、ただ單に皇室によつて主宰される和歌の詠進コンクールといふだけのものではありません。その年の一月に天皇による御題が發表されてから、詠進歌の締め切りが行はれる十月までの十ケ月間といふもの、世界中の參加希望者が謂はば天皇の發せられたヴィジョンの中に入るわけですから。「海」といへば、世界中の人々が「海」といふ發想をするわけです。十ケ月もの間……。これは大變な靈力を持つであらうと思はれるのです。

美智子様の、有名な、「皇室は祈りです」の祈りとは、とりわけこのやうなヴィジョン、靈力であり力とむすびついたものでありませう。それが端的に示されるのが歌會始なのです。さうしますといふと、私は、そこに、天皇の祈りに

ふるスピリチュアルな場といつたものが十ケ月間できて、人々の上に働きかける。靈性的な場においては因果律に逆らつて出來事が起るといふことは珍しくありませんから、大きな出來事が起るときには、御題や御歌がさきがけするといふことがまま起ります。今上天皇皇后陛下の御世に、そのやうな不思議は三、四回は起つてをります。

昭和五十一年一月の歌會始で「海」といふ御題は發表され、翌年一月の歌會始でこの御題による美智子妃の御歌が披講されました。するとそのほぼ十ケ月後の同年十一月十五日に横田めぐみさんが新潟の灣岸から北朝鮮に拉致されたのでした。いはゆるこれは「因果關係を越えた偶然の一致現象」といふ類の出來事に屬することであつて、こじつけであつてはならないことですが、私の心には掛かつてをりました。そこで、あるとき絶好の機會が訪れましたので、そのことを皇后様に直接に御質問したことがあります。

私はかう申し上げました。

「この御歌を拜しますと、何か言ひ知れない巨大なヴィジョンをもつて皇后様は見ていらつしやる、いつも私はそのやうな感動を新たに致してをります。どのやうな機會にお詠みになつたのでせうか」

すると、お答へはこのやうでした。

たしかにこれは、鳥のやうに上から見ないと見えない日本列島の姿を詠んだものです。御題に基づいてあるときふと思ひついたことで、どの海といふわけではありません――と。

さらに、續けてかうおつしやいました。

當時は無人燈臺といふものがなく、どの岬にも燈臺があり、燈臺守がゐました。「喜びも悲しみも幾年月」といふ映畫にも出てくるとほりです。その人たちは一年に一度、燈臺守同好會を作つて集まつてをられ、郵政省の管轄ですけれども、平成の始めまで宮殿に見えてゐました。貞明皇后もその燈臺守の歌を讀んでいらつしやいます……。

伺つてみなければ背景といふものは分らないものです。私は、實景を詠んだものではなく巨視的なヴィジョンしか感じませんでしたので、御說明を伺つてやや意外の感を受けますとともに、しかし、お作品としては單なる叙景歌でないものに仕上つてゐる――このことが重要なのであらうと改めて感じさせられた次第であります。

結果としてこのやうなヴィジョンを先取する、予知する、予告するといふ不思議が現實に起つたのではあるまいか、といふことです。

皇后陛下になられてからは、いよいよかういふ不思議が

幾つも起つてをります。私は、平成の御代を、第一期（平成元年―七年）、第二期（八年―十七年）、第三期（十八年―二十三年）、第四期（二十三年―）といふ風に分類させていただいてをりますが、それぞれの時期は極めて意義深い感動的出來事によつて區切られてをります。

このうちの第三期は、悠仁親王の御生誕によつて開始されました。この國民的大吉兆は、平成十八（二〇〇六）年一月、歌會始に發表された「笑み」だつたのではなからうか、かう考へさせられてならないわけです。悠仁親王殿下の御生誕は、九ヶ月後、九月六日のことでした。

今上天皇の御代になつてからの歌會始は平成二年に行はれ、その御題は先帝陛下がお定めになつた「晴」でしたが、その後、森、風、空、波、歌、苗、姿、道、青、時、草、春、町、幸、歩み――といふ風に續いていき、平成十八年に至つて、突然に「笑み」が出てくるのです。それからまた、自然に戻つて、月、火、生、葉、岸、立、靜、本と續いていきます。

人間の喜怒哀樂を主題としたのは一つもなく、たつた一度だけそこから選ばれたのは、喜び、「笑み」であつて、そのあと日出度く皇孫の誕生となつた……。よく大御歌（おほみうた）は豫祝であるといはれますが、そもそも天皇による祈りとは何であるか、祝詞（のりと）とは何であるか、さういふことまで遡つて考へさせられずにはゐません。

この國民的大吉事から五年目に、今度は大凶事――東日本大震災が起りました。國民の誰もがそのことを知らず、岸邊がそよとも動かなかつたときに、平成二十三年（西暦二〇一一年）一月、歌會始において、なんと「岸」といふ御題が發表せられたのでした。そして、それから三月經つた三月十一日に東日本大震災になつたのです。翌年、その御題で歌會始が開かれました。「岸」といふ、天皇のヴィジョンの中に世界中の人が入つていきつつあつたさなかの大異變だつたのです。そのときに兩陛下がお詠みになられた御歌がこの二重唱でした。

津波來（こ）し時の岸邊は如何なりし
見下ろす海は靜まる（御製）
歸り來るを立ちて待てるに季（とき）のなく
岸とふ文字を歳時記に見ず（御歌）

さきほどのお作、「海」について御述懷下さいました中で、大津波のあと、「岸」といふ歌を詠んだときに、拉致された人々のことをも思つてゐました、とかうおつしやられたことを思ひ出します。初めて《歸り來るを立ちて待てるに……》を拜しましたときに、何となくそのやうに私も感じさせられたのでしたが、それは間違ひではなかつたと、なほ感激させられた次第です。

「岸」の御題が發表され、三ヶ月後に東日本大震災が起り、そのあと三陸沖海岸の、まさに「岸」邊に兩陛下がお立ちになつて、私共には何も見えない海に向つて深々と拜禮された、その光景には、日本國民は齊しく感泣せしめられました。續く年から、主上の祈りが「立」「靜」として御題に表はされた御心を、私共は十分にお偲びすることができます。平成二十六年の一月に發表された「本」といふ御題については如何だつたでせうか。

これについては、私は、特別に自分自身が關はらせていただいた或る出來事を例に引かずにゐられません。それは御題發表からちやうど三ヶ月後、その場も伊勢において、私共少數有志がまさに《ルーツとルーツの對話》と題する日佛シンポジウムを擧行するに至つたといふ暗合であります。これは、四十年前に、アンドレ・マルローが京都のユネスコ會議で「東西文明の對話はルーツとルーツの對話である」と述べた提言に基いての企畫の實現でした。ちなみに、四十年前の最後の訪日においてマルローは、當時東宮の兩殿下でいらした兩陛下に御親講申しあげるといふ御緣を戴いてをります。

ここで、もういちど、美智子樣の歌風の變遷の意味を考へたいと思ひます。それは、先にも見ましたとほり、初期皇太子妃でいらした頃の抒情的スタイルから、皇后となられてからの、世界の人々とも交はりつつ、そのために同胞の悲しみ苦しみの中に深く入ることによつて更に奥行きをきはめてこられた、そのやうな御變化であらうかと拜せられます。さうした中で一本太い筋が目にみえず通つてゐるやうに思はれるのですが、それは、先帝陛下の御遺志の繼承であるとは言へないでせうか。この御遺志とは、事實上の昭和天皇の辭世とも申すべき「憂國サイクル」の最後の歌、

やすらけき世を祈りしもいまだならず
くやしくもあるかきざし見ゆれど

に表はされた御心情ではありますまいか。《くやしくもあるか》との荒御靈（あらみたま）風の直情を示した御製は歴代天皇にはなかつたといふことで、識者は畏れ戰（おのの）いたとのことです。が、それもそのはず、そこには、その年――昭和六十三年――

にも、そして最終的に、靖國神社に詣でることが叶はなかつたとの痛恨が如實に顯はれてゐるからにほかなりません。この御製は長い間、多くの人々から忘れられかけてゐましたが、それから八年後、突如として皇后様が

海陸のいづへを知らず姿なき
あまたの御靈國護るらむ

と詠ひ出されるのを聞いて、はつと國民は襟を正さしめられたのです。なんとここには、御題に、はつきりと、「終戰記念日」と記されてゐるではありませんか。それは、平成七年に、、戰後五十年を期して國會が「村山談話」とともに「戰爭謝罪決議」を行ふといふ取りかへしのつかない愚行を表明した年の翌年のことだつたのです。日本の墜落の極まりとなつた時です。そのやうな時にあたつて、天皇皇后のお取りになつた行動とは如何なるものであつたか。忖度申しあげるに、おそらく、眞に拜跪すべきは英靈に對してであるとのお考へから、「戰後五十年慰靈の旅」を敢行なされたのではありますまいか。

《海陸のいづへを知らず》の御歌は、さうした慰靈の旅の中から生み落とされた背景を考へれば納得のいく御心情とはいへ、これを敢て「終戰記念日」と題された御心底のほどは、更に深く私共のお偲び申しあげねばならないものがあると思はれるのであります。

それより三年前、平成六年に詠まれた御歌があります。

うつつにし言葉の出でず仰ぎたる
この望月の思ふ日あらむ

この御歌を誦しますたびに私は、ああ、日本人は、何かと苦難の目に遭つても仕様がないな、西洋でいへば聖女にも比すべき、美智子様のやうな方を、いくら言論の自由とはいへ、あのやうな心無い週刊誌などの中傷によつてお苦しめし、失語症にまでかからせたのでは……と思はずにはゐられません。日本人の墜落、ここに極まれりといふことです。

しかも、さういふ御容態にありながらも、なほかつ、翌年、硫黄島に陛下とともに赴いて魂鎮めをしてをられるのです。

精魂を込め戰ひし人未だ
地下に眠りて島は悲しき　（御製）

慰靈地は今安らかに水をたたふ
如何ばかり君ら水を欲りけむ　（御歌）

兩陛下のペアでお詠みになつた和歌は二十組ほどはありませうか。いづれも名歌とたたへられるお作品ばかりですが、わけても平成六年のこの「硫黄島」は絶唱として後世に傳へられていくであらうと信ぜられます。

と同時に、天皇皇后のそれぞれお役割の違ひが、ここにも明瞭に表はれてゐるかのやうに拜されます。

いつも、私は、今上陛下の御製を拜しますたびに、眞つ直ぐに瀧が落ちてくるといふ、粛然の氣に打たれます。那智の瀧のやうな垂直性といふことで、天と地を貫いて、水が、光が、滔々と落ちてゐる。これをそのままに詠ふのが大御歌であり、それ以外のものではない。それは餘人の誰にも出來ず、つまりはそれが大御心の表はれといつたものであらうかと考へさせられます。しかし、落ちる瀧の水が流れ出すのは、「忍」によつてである、ある種の忍ぶ心によつて初めて水が流れ出す――これが美智子様の御歌といふものではなからうか。では、垂直に對してなら水平かといふと、さうではありません。

水平ではなく、奥行きなのです。奥行きを傳へるのが美智子様の御歌であると申せませうか。御歌の奉でる横パをとほして、大御心はよりよく私共に傳はつてくるのです。

アンドレ・マルローも、ダライ・ラマも、かねて、、十一世紀は日本の世紀になるであらうと言つてをられました。世界の古い國々、宗教王國がドミノ倒しのやうに倒れた二十世紀に、皇室を戴く日本だけが本質的には「大嘗祭」によつて成り立つ永遠の祭祀國家として存續してゐることの意義は、響へやうもなく大きい――それがマルローやダライ・ラマの豫告の眞義であらうかと思はされます。どう見ても、ただの物質的繁榮の國と言つてゐるはずがないと思はれるからです。

それは、日本といふ國がなくなつてしまつたならば、世界で唯一連綿と傳へられて來た高度の靈性文明が無くなつてしまふといふことを意味します。殘るはグローバリズムの唯物主義文明だけでいいのかどうかといふ大問題なのです。

ある日、正田美智子さんといふ一人のお嬢さんが、世界唯一最古の祭祀國家たる日本の日嗣皇子に嫁がれて、辛酸の限りを嘗めて、紛ふことなき偉大な皇后陛下になられて、兩陛下共々、世界と國民の安寧を祈られ、その御感懐をかくも美しいポエジーに表現して殘しておいでになられた

——そんな國は、世界史上、日本しかありません。安倍政權のもと、日本を取り戻す秋に常り、この意義を深く私共は省みるべきであらうと思ひます。

（たけもと　ただを　筑波大學名譽教授）

流

漢字以前の日本の文字

（日本には漢字の傳來以前には文字が無かつたのか）

安田倫子

言葉はその民族の精神の發露だ。

日本は「察する文化」だと言はれてゐる。「察する」とは、言葉で表現する以上に相手の眞意を汲み取つて深く理解することを指す。

日常生活上では、身近な人に接してゐれば、相手が何を考へてゐるか、相手の心情は何なのか大體の察しがつく。しかし、特に仕事上であつたり、文化的な催し物、公的な祭祀の直會（一般では行事の後の懇親會）の時などは、神代からの日本（大和）の國の成り立ちから歴史的な出來事、エピソードの共有など、場に相應しい「基礎的教養」を積んでゐることが求められる場合がある。

そもそも言語としての言葉の起源は、相手との意思疎通を圖ることを目的とする。

勞働、日々の暮らしや祭祀、儀式の中で、精神世界の安寧を願つて、神々と會話し、自分の感動や感謝の氣持ちを「歌」、もしくは「歌に調べを載せて」傳へることから始まつたと考へられる。

例へば、歌は、まづ大切な心の交信手段として用ゐられた。

一方、武道や傳統工藝をはじめ、建築、漁法、農業など技術を伴ふ世界のことでいへば、奥義、コツは文字や繪や形で書き記さず「口傳」という體裁が取られる。

師から學びたい者は、「見取り稽古」、すなはち技を見ただけで、師から口や動作の手ほどきを受けなくても、會得していかなければならない必然があつた。

我が身を辨へ、只管努力を重ねる態度で修行するといふ學びの在り方が、言葉を必要としない世界での物事の本質を極める、といふ姿勢を養つてきた。

「察する」とは、見たままを寫し取らうとする「口傳」の方法に近い活動である。

そして、なんとなく了解した、その「なんとなく」を過不足なく表現する思考、感情、に合致した言葉（語彙）の發見、發明、工夫には、それを願つた人々の永い永い歴史といふ時間が必要であつたことは想像に難くない。

文化の傳承方法として檢討する場合、後世の者の察する

ところに委ねたのでは不確實である。より確實に後世に傳へていくには、規則性のある形式として遺しておく、後々解釋するためのルールを決めて、一度了解を得たら變らないものを創作する必要に迫られる。それが文字である。

わたくしは、現代において、國語學關聯の講演會などで當然のやうに發言される、ある内容に、ここ四十年程ずつと疑問を抱いてゐる。

それは「漢字が支那から傳來するまでは、日本には文字が無かつた」といふ說ばかりが支持され、教育の現場＝國語、社會科ばかりではなく、あらゆる場面で「漢字以前の日本古來發祥の文字無し說」がずつと有力であるといふ現狀についてである。

一般的には時期に若干のずれはあるが、一應、西暦五三八年百濟の王仁が『千字文』と『論語』を携へて來朝し、それを日本人が學んで、やつと考へてゐることを文字に書き表すことができた、といふ說を取つてゐる。果してさうであらうか。（ちなみに、この時、同時に佛教も入つて來た、とされてゐる。）

例へば、完全な漢文では一般には理解が行き渡らないことがあるので、當時既に日本で使はれてゐた言葉（大和言葉＝和語）に漢字の一字一音を當てはめて、日本語（國語）の語順で使用した、これが「萬葉假名」であると言はれてゐる。

いはば、漢文訓讀の書き下し文、漢字假名混じり文（この、假名にあたる文字も漢字一字を當てたので、一見全て漢字表記）である。

我が國で現存する一番古い歷史書『古事記』（七一二年成立）は、この萬葉假名で書かれてをり、それから七二〇年（養老四年）に勅修された正史『日本書紀』は對外向け、外交の一環として世界の人に日本の事を知つてもらはうと、當時の國際語であつた漢文で表記した。と、そのやうに學校では習つてきた。

勿論『古事記』の本文中の太安萬侯の書いた工夫は、「上古の時、已に訓に因りて述ぶれば、詞心に逮ばず。全く音をもつて連ぬれば、事の趣更に長し。ここをもつて今、或ひは一句の中に音訓を交へ用ゐ、或ひは一事の内に全く訓をもつて錄せり。」

この文言を見れば、太安萬侯の何とかして大和言葉を漢字に置き換へようといふ苦心はわかるが、太安萬侯は、訓といふ音には注目したが、日本古來の文字そのものには敬意を拂つてゐないことがわかる。

せつかく漢字といふ便利なものが手に入つたのだから、これを活かして國史を編纂できたらどんなに便利だらうか、と考へた。

しかし、苦心をする中で、本文にあるやうに、昔から傳はつてゐる言葉を漢字だけで當てはめようにも、どうにも大和言葉の方が語彙も音も多くて、解說も必要で纏まりがつかない、と嘆いてゐるのだ。

さて、漢字傳來時と言はれてゐる時代の聖德太子の活動を少し見て見よう。

聖德太子（推古天皇の甥。皇太子として萬機を攝行させた。厩戸皇子（父は用明天皇で、推古天皇の同母兄。また、母は推古天皇と姉妹）。

第三十三代推古天皇。御在位は（五九三年一月十五日～六二八年四月十五日）

漢字傳來の翌年、五九四年（推古天皇二年）「三寶（佛・法・僧）を敬ふべし」といふ詔が出される。

六〇三年（推古天皇十一年）冠位十二階制定。

六〇四年（推古天皇十二年）十七條憲法制定。

六〇七年（推古天皇十五年）隋に小野妹子を敕使として派遣し「日出處天子至書日没處天子無恙云々」（日出處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙なきや・・・）と、初めて日本の獨立を強調する目的で親書を持たせた。これに對して隋の煬帝が、日本を「日出づる國」、支那を「日の没する國」と書いて來たこと、當時、支那の皇帝にしか使はせなかつた「天子」といふ語を日本が使つて來たことに對して激しく怒つたといふ話は今も殘つてゐる。

ついで、聖德太子は次回の遣隋使からは、外交政策のためだけではなく、文字・學問專門の研究者學者も派遣した。

六二〇年（推古天皇二十八年）蘇我馬子と一緒に『天皇記』、『國記』を編纂して獻上。（この二年後に聖德太子歿。その四年後に蘇我馬子歿）

主なものを辿るだけでも、聖德太子は、通說である漢字の傳來から日を幾何も經ないうちに漢文讀解、漢字の書寫は出來てゐたといふことになる。これは傳來以前に既

に日本には漢文は傳はつて來てゐて、朝廷の中では公文書は漢文が用ゐられてゐたこと、關係者は漢文を學んでゐたことがわかる出來事だ。

例へば、朝廷の行つて來た政務の記錄は、故人の日記などより、重大事項なので正確を記す爲には口傳だけとはいかないだらう。

歷代天皇は、國を擧げての祭祀を執り行ふ代表者であつたから、その內容を正しく次の天皇に傳へなければならない。天皇しか知り得ない內容も國としてはあるはず。それを誰でもいいから語り部に暗記させてそれでよし、といふわけにはいかなかつただらう。

次に『古事記』の本文を見て見よう。

序文より引用

ここに、天皇、（注：第四十代天武天皇は御在位（六七三年三月二十日～六八六年十月一日）詔したまはく「朕聞く、諸家の賫たる帝紀および本辭、すでに正實に違ひ、多く虛僞を加ふと。今の時に當りて、その失を改めずば、未だ幾年を經ずして、その旨滅びんとす。これすなはち邦家の經緯、王化の鴻基なり。かれ、これ帝紀を撰錄し、舊辭を討覈し、僞を削り實を定めて、後葉に流へんと欲ふ」とのたまふ。

時に舍人あり、姓は稗田、名は阿禮、年はこれ廿八。人となり聰明にして、目に度れば口に誦み、耳に拂るれば心に勒す。すなはち阿禮に敕語して、帝皇の日繼および先代の舊辭を誦み習はしめたまひき。然れども運移り世異りて、未だその事を行ひたまはざりき。（引用終り）

本文ではこの後、編者の太安萬侶が「史書すことを絕たず」「ここに舊辭の誤り忤へるを惜しみ、先紀の謬り錯れるを正さんとして、和銅四年九月十八日、臣安萬呂に詔して、稗田の阿禮が誦むところの舊辭を撰錄してもつて獻上せよ」と天武天皇の敕があつたことが記されてゐる。續いて「然れども、上古の時、已に訓に因りて述ぶれば、詞心に逮ばず。全く音をもつて連ぬれば、事の趣更に長し。ここをもつて今、或ひは一句の中に音訓を交へ用ゐ、或ひは一事の內に全く訓をもつて錄せり。すなはち辭理の見え難きは注をもつて明らかにし、意況の解し易きは更に注せず。また、姓の日下に玖沙訶と謂ひ、名の帶に多羅斯と謂ふ。此の如き類は、本に隨ひて改めず。」

（參考文獻）『ことばで聞く古事記』〈上卷〉青林堂

『古事記』は天武天皇の敕命によつて編纂が始まつた、現存する我が國最古の歷史書。

天皇の系譜・事象・神話などを記した『帝紀』『舊辭』などの書物を、稗田阿禮が誦習（書物などを繰り返し讀むこと）し、それを太安萬侶が四ケか月かけて編纂し、次に元明天皇の御世の和銅五年（七一二年）に完成し、天皇に獻上された。上・中・下三卷に分かれ、寫本が現在に傳はる。

『古事記』を編纂するにあたつて、舍人（天皇や皇族の近習）であつた、非常に記憶力の良い稗田阿禮（當時二十八歲・男性）に、覺えてゐるところを「誦習」させたとある。が、ここは暗誦のみをいふのであらうか。

天武天皇が「帝紀を撰錄し、舊辭を討覈しと、敕を出されたときに、それらの內容が正しく傳はらなくなつてしまつてゐる」こと、また、正しく後世に傳へて行かなくてはならないことを考へ、それを修正し歷史に基づいて確認作業をさせようと命じられたのであるから、たつた一人の「舍人」（お役目を果すものは複數ゐたと考へても不思議ではない）に覺えさせてゐるだけとは考へにくい。

それに、初代神武天皇卽位（推古天皇九年の六〇一年から逆算すると、辛酉年卽位說、庚午年一月一日說、現代の曆では二月十一日になる）があるので紀元前六六〇年になる。お生れになつたのは紀元前七一二年二月十三日とされてゐる。殘したのは神武天皇七十六年三月十一日）からこの間の出來事は膨大な量になつてゐるはずである。一人の人間の記憶量から推測してみると、暗誦してゐるだけではなく、なにか、他の形でも傳へられてゐるのではないかと思つてみるのも自然なことである。

太安萬侶は「訓で傳はつたものを音に當てはめることが出來ない言葉がある、それでは新たに傳へるといふことが出來ないので、ここは音訓交じりの漢字の使ひ方でいかう、解說を加へるとややこしくなるのでそのままにした、といふことを書いてゐる。

つまり、どうしても漢字を使ひたかつたのだ。

正史としての役割は日本國として表向きの「公」の姿勢

を内外に示すことだ。これを書き記すにあたつて太安萬侶には全く問題にされてゐないかのやうな日本の古代文字の存在。彼は漢字表記に拘つてゐたとしか考へられない。

漢字漢文はいはゆる朝廷でもごく一部のエリートの使ふものだつたので、そこらへんに以前から流布してゐる日本古來のもの（地元のもの）には目を向けなかつたといふことか。

否、既に日本固有の古代文字は存在してゐた。文字としての規則性もあり、書物として遺されたもの、石に彫られたものが最近になつてやつと見直されてきてゐる。

この戰後七十年間、わたくしたちは、日本は文明が遲れてゐた國であつて、文字は古代には存在せず、すべて漢字の傳來とともに文化の恩惠を受けてきた、といふ史觀に捉はれて、日本人自身の文化遺產を顧みようともしなかつた、偏見と自虐に滿ちた經緯があることも忘れてはならない。

では、日本の古代文字といはれるものに目を向けてみよう。

代表的な文字は「ヲシテ」である。

「よみがえる繩文時代　イサナギ・イサナミのこころ」池田滿著・平成二十五年四月展望社刊。（『古事記』『日本書紀』原書ヲシテ）副題。ミカサフミ、ワカウタノアヤ、アマテルカミが解き明かす。

著者の池田氏は一九七二年から古代文字の研究に没頭され、一九九二年、最古の祖本『ホツマタエ』發見、修理。一九九三年復刻上梓（新人物往來社）一九九五～一九九七年『校本三書比較ホツマタエ』（日本書紀、古事記との對比・（新人物往來社）以降、本年まで原文を讀み解いてきて、神代文字に對する偏見と俗說を拂拭することに大いに貢獻してゐる。

傳へられてきた古代文字・神代文字と呼ばれてゐるものの一例をあげる。

「ホツマタエ」「フトマニ」「ミカサフミ」以上三書を「ヲシテ文獻」といふ。

我が國固有の「ヲシテ」文字で記され、五七に綴られた一萬二千行餘の古文書である。

この文書の出現により、『古事記』『日本書紀』の矛盾だらけで辻褄の合はない部分のストーリーが說明できるやうになつた。

他に「カタカムナ」「アマノコヤネ」「アマテルカミ」「サンカ文字」「アワ歌」「豐國文字・ウヘツフミ」（今のカタカナにそつくりな文字が出て來る。）漢字の一部分をとつてカタカナが出來た、といふ說とは出所が違ふ。もつと古い神代の時代、繩文時代の文獻だ。

また、石に彫られた古代文字はやはり「新しく何者かが彫つた、作つた」とその否定する根據のないままに、囁かれてきたが、二〇〇〇年に入つて、考古學の進步により、石のDNAが計測されるやうになつて、俄然、世界的な「ペトログリフ」（通常岩繪、線刻、畫、文字と呼ばれたり、岩面彫刻、岩石線畫、岩面陰刻ともいはれる）の仲間入りをして日本以外の研究者の間（アメリカ、ハーバード大、フランス）では、これも繩文時代のものだといふ證明がなされつつある。日本の研究者としては吉田信啓氏（考古學者）の名前が擧げられる。著書に『神字日文解（かんなひふみのかい）』（副題／ペトログラフが書き換へる・・・）一九九四年中央アート出版社刊。など多數。

これはホツマ文字とは區別されて、主に漢字傳來以前のものをペトログラフ（ペトリグラフ）、漢字傳來以降のものを「碑文」または「繪」と呼んで區別して研究されてゐる。

この古代文字や神代文字の研究が進めば進むほど、「日本には漢字が入つてくるまでは文字が無かつた」といふ偏見がなくなると考へられる。

「ヲシテ」で「國」を解いてみよう。

漢字の意味とは全然違ふ。

「トノオシエ」（アマガミが自然の惠みを受けて惜しみなく人々に與へ續ける「トノオシエ」といふ憲法（のり）によつて治まつたクニトコタチの世のことをいふ）

漢字の國、支那は、武力による政權交代を繰り返してきた國である。その特徵から、人々は住むところは城壁ですつぽり周圍を囲つて、夕刻になると、敵が襲つてこられないやうに門を閉じる構造で街、城、國を形成してきた歷史がある。

『古事記』の一文から、このやうな國體を持つ國をウシハク國と日本では呼んでゐる。

従つて支那では「國」の文字は武器を持ち城壁を築いて戰ひに備へる、といふのがごく普通の國である考へ方を表す文字だ。

一方、日本は神代の時代から國は闘つて奪ひ合ふものではなく天皇が國民に幸福を與へ續け、皆の話し合ひで「和」を尊んで結ばれてきたといふ國柄である。このやうな國體を持つ國をシラス國と呼んできた。

從つて、漢字の成り立ちから言へば、「國」といふ文字は、日本國體には不向きな文字であつた。

日本人自身が、もつと自分の足元を見直して、日本古來の先人の研究し、傳へようとしたところの遺産に着目し、謙虚さの中にも誇りを持つて日本古來の文字について學んでいいのではないかと考へる。

（やすだ りんこ　本會常任理事・倫子塾主宰）

第十二回契沖顯彰短歌大會

今後の參考に、兒童・生徒の各賞に入賞した歌の寸評

吉原榮德

契沖研究會（尼崎市）は、本年で、創立十九年目となります。創設時より多くの行事をして來ましたが、今や主要事業となります「契沖顯彰短歌大會」は、故あつて、現在、十二回目を終へたところです。

しかし、關係者の工夫と努力により、二回目からは、兒童・生徒の應募も勸奬し、今では、一萬人を超える盛況振りです。大會創設の理念は省略しますが、以後發展を期し、短歌の性格や方法などの解説をし、近頃は、特に、毎年入賞者（一般社會人・兒童（小學生）・生徒（中・高生）の各二十三人の紙上講評をしてゐます。

但し、社會人は、當日、選者からの講評があり、また、時間の都合もありますので割愛します。

歌を詠むに際して

◎短歌は、5（初句）、7（二句）、5（三句）《上（本）の句》

7（四句）、7（結句）《下（本）の句》

の三十一音數が基本です。

しかし、5、8、5、7、7。5、6、5、7、7のやうに字の音數が多い句と少ない句などがあり、前者は、字餘り、後者は、字足らずと言ひ、文章上不都合がなければ、それは、許されますので、餘り神經質にならず、心の儘にお詠みください。

◎歌の形の事が了解出來れば、次は何（主題）を詠むかを決めます。

後程、各賞入賞（一般社會人・兒童（小學生）・生徒（中・高生））のうち四十六名について、今後の作歌の參考にと、簡單な講評（今回は、各歌の添削はせず）をしましたので、それを御覽頂きますと、主題には□印を、歌を詠んだ場所や對象物をも記してゐますので、その構造がお分り頂けませう。なほ、兒童・生徒の作歌の主題は、年々、多彩になつて來てゐるのは視野の擴大を示すことで、とても喜ばしいことです。

もつとも、主題を總じて言へば、當然ながら學校關係、家族關係、友人關係等、現在の生活の社會的範疇の事柄が主體となります。皆さんも、少し注意して周りを見れ

ば、面白いものに出會ひ、興味を昂らせれば、必ず新しい發見があるはずです。

◎「歌材」（歌に詠む材料）を見つけるには、やはり、ものをよく見る、聽く、觸るなどの關心、觀察が必要です。かくして、感性や考察力は磨かれるのです。

そして、それを歌にするには、まづ、その場面のどこを「切り取る」（どの部分を詠む）かを決めます。

◎短歌は、歌謠→和歌→短歌と歌の進化・變遷の系譜の中で成立したものですから、前代の技法等、培はれた歌の屬性は残るものです。従つて、傳統技法には句切れ、見立て、比喩、掛詞、序詞、オノマトペ（擬音［聲］語、擬態語をまとめて言ふ）、倒置法、對句、繰り返し等があります。

◎この中にて、句切れは、古來、歌の形として5、7、5（上（本）の句）、7、7、（下（末）の句）の分け方があり、上の句で、現在の狀況（態）を言ひ、下の句で、その理由を言ふ方法等があり、それは、今も生きてゐますので、御注意願ひます。また強意を示す、句切れや倒置法は、今もよく用ゐてゐます。

◎オノマトペも具體的表現なので、共感を得やすいと言ふ利點があり、契沖大賞の兒童の部の歌はその成功例でせう。

◎なほ、歌は何を詠むかが主眼なので、誰が何處で、誰に、何時、何をしたかを分り易くするために、表現の工夫をする必要があります。

以上の事は、自（詠み手）、他（享受者）共に必要なことです。

兒童・生徒の入賞歌の寸評

以下入賞の順位通りに、各兒（兒童）生（生徒）の歌を並べますが、歌は、ゴシック體、表記は作者の通り。その下に、學年と男・女の別を示し、學校名・名前は、省きました。

1兒**ねこじゃらしさわさわしてるきもちいい**
こちょこちょしたらあははははは（小一・女）

猫じやらし　場所は、道端か。作者が猫じやらしで遊ぶ。

猫じやらしは、エノコロ草。道端に見る雜草だが、猫を戯すのに使はれます。

歌は、「初句切れ」なので強い印象を與へます。先づ、穗先の特徴を述べ、次いで、自分にも試してみますと、こそばゆかつたと初體験の感慨を詠んでゐますが、オノマトペ（擬音語・擬態語）の用法で效果を上げてゐます。

特に、大人語と子供語の區別の不明になりつつある今日とは言へ、小一の兒童が「爽々」と言ふ語彙を用ゐてゐるのには、驚きです。テレビや漫畫の影響か。

生**けんかして私が我慢してるのに**
先に泣くつてそんなのずるい（中三・女）

喧嘩　對象は友人。作者が友人とけんかの果て。

喧嘩して自分は、泣きたいのを我慢してゐるのに、友人に不利を逆轉する寶刀、泣きの一手を先に、拔かれた作者の悔しさが傳はつて來ます。

喧嘩の歌は妹との喧嘩（47＝『詠草集』の歌番號。以下同じ）。父母の喧嘩（272）などがあります。

2兒**いもうとがふうせんとゆびさして言う**
夜空を見るとまんまるの月（小二・女）

月　場所は、家の庭。作者が、妹の指差す風船（月）を見る。

月を風船と言ふ妹に應へてやる家族の優しさが、空に浮んだ朧の月のやうに、ふくと浮び上がつて來るやうです。

なほ、妹が月を風船と見たのは、「見立て」（意思的比喩）ではなく、「誤視」であることに注意せねばなりません。

生**秋風に貴方のかみがゆれている**
見えそうなのに見えない横顔（中二・女）

貴方の横顔　對象は、戀人。作者が秋風の中で、彼の横顔を見ようとする。

もどかしい戀情を示す。下の句で、顔を詠んだ歌には、「君の顔」を詠んだ歌（335）もあり、戀情の初歩的動機（モチーフ）は、やはり、顔なんですね。

3兒**わたしよりかわいいねがおよこにいる**
おつかれさんのおとうさんだよ（小二・女）

父の横顔　場所は、寢室。作者が、父の寢顔を見る。

平素權威を示す父が疲れて寢込んだ時の子供のやうな

あどけない顔を發見。父への一層の親愛度がました事でせう。比較の對象に、自分を置いてゐるのは、よい。

生本当は感謝してますでも言えない
　こんな時には皿洗いしよう（中二・女）

母への感謝　場所は、素所。母への感謝を皿を洗ふと言ふ形で表はさうとした。

上の句は、二、三句で切れてゐるのは、感謝の心を素直に言へないで躊躇する氣持の現れでせうか。作者は、心の表現として、皿洗ひをする事を思ひつき實踐する。作者の溫かい心は、母に通じてゐる事でせう。

4 兒色づいたいちょう並木の真ん中を
　風といっしょに自転車走る（小五・男）

自轉車走る　場所は、銀杏並木。作者は風と一緒に自轉車の走るのを見る。

色付いた銀杏並木と美しい色彩の靜的背景を置き、その中を主體となる自轉車を風と一緒に颯爽と走らせると言ふ靜・動を對照させる事で、繪畫性と爽快感とを浮き立たせてゐます。

生防波堤のびるとこまで潮風の
　声に魅かれるひんやりとした耳（高一・男）

潮風の聲　場所は、防波堤。作者は風の音を聞きながら歩いてゐる。

防波堤を歩く距離で長さを、潮風に吹かれて冷える耳で、時間の長さを示したか。かくして、潮風の聲（音）に魅かれる思ひの深さを示したやうです。

5 兒筆箱の中で鉛筆せいくらべ
　ちぢむ鉛筆わたしはのびる（小四・女）

鉛筆　場所は、教室か。作者は筆箱の鉛筆の長さを見てゐる。

縮む鉛筆（削られ短くなつた鉛筆）に反比例して伸びる（學力が增す）私を「ちぢむ」と「のびる」の對句的用法でリズミカルに表現してゐるのは、樂しい。

生泣いたらええ昔はおれが励ました
　今はお前がおれを励ます（高一・男）

泣いたらええ　場所は、不明。作者は友人と勵まし合ふ。

泣いたらええ（初句切れ）悲しい時は、苦しい時は、お互ひ様で、今では、勵ます主・客が、轉倒したのを詠

んだのだろうか、それにしても難解な文脈。

6 兒おかあさんどようにちょうあさねぼう
　おこしにいくのはぼくのおしごと（小一・男）

僕のお仕事　場所は、お母さんの、寢所。作者は、疲れて寢てゐる母を起しに行く。

家を支へるお母さん（初句切れ）は、土曜、日曜は疲れて、朝寢坊、そんなお母さんを起しにいくのが僕のお仕事と誰にも出來ない大役を得意氣に言つてゐます。小一の坊やなので、許されるのです。

生何気なく笑って話して過ごす日々
　ふと気がつけば別れは近い（高三・男）

別れ　場所は、學校か。作者は、友との別れ（卒業）に氣付く。

何氣なく笑つて過す（樂しい）日々、それにも、やがて、近き別れがあり、それに氣付く。かうして、人生のありやうを教はつていくのです。

7 兒にちようびばあばがきたよたのしいよ
　じいじもきたよもっとたのしい（小二・女）

日曜日　場所は、自宅。作者は、日曜日に婆ばと爺ぢの來たのを喜ぶ。

日曜日（初句切れ）に、婆ばと爺ぢの來訪を喜ぶのだが、爺ぢがより嬉しいとは、子守に馴れない爺ぢの方がよく遊び相手になつてくれるからでせうか。

生ガミガミと叱り続ける母の気持
　分かるような分からないような（中二・男）

叱り續ける　場所は、自宅。作者は、母の叱る主旨に混迷する。

ガミガミと叱り續ける母の氣持ち、分かるやうで分からないやうとは、お母さんも怒つてゐるうちに、叱る種が擴散し、自身も昂奮してきたからでせう。

機嫌の惡い母の歌は、（254）にもあるが、家庭を守る母の役割は大變です。

8 兒先生にいつもおこられたたされる
　それでも学校大好きなんだ（小二・女）

学校大好き　場所は、學校。作者は、先生にいつも怒られる。

先生に、いつも怒られ、立たされるのに、それでも學

校大好きなんだと言ふ。一見矛盾してゐるやうだが、學校とは、先生から勉強や規律（オーダー）を習得するだけにあるのではなく、もつといろんなものを學ぶ多様な所なのです。

それにしても、作者の矛盾した心根が學校の有り様を教へてくれます。

生 緊張を表に出せず後手に

組んだ両手に力がこもるよ（中二・女）

緊張　場所は、舞臺。作者は、緊張感の處理法を試みる。緊張を表に出せない、その解消法として、後手に組んだ両手に力を籠めると言ふ。

「表」と「後」での葛藤が緊張を解さうとする懸命な氣持ちを浮き上らせてゐます。

9 兒 かくれんぼかくれているのにみつかった

わたしのかげが出ちゃってたから（小三・女）

隠れん坊　場所は、不明。作者は、隠れたが見つかる。隠れてゐるのに見つかつたのは、隠れたつもりが、わたしのかげが出ちやつてたからと、想定外の事態に對する驚きを詠んだが、「二句目と三句目」と、「四句目と結句」とがそれぞれ意外性を強調してゐます。

生 お母さんきげんによって声変わる

みけんのシワが二本増えとる（中二・女）

お母さん　場所は、自宅。作者は、母の不機嫌を觀察。お母さん（初句切れ）の不機嫌を、聲が變るのと、眉間の皺で感じ取る。この歌以外にも、お母さんの憤怒の形相や聲から、鬼は、本當にゐると詠んだ歌もあります。恐ろしい母の顔の觀察は、やがて、母への理解へと進む事となりませう。

10 兒 公園でいつも見かけるあの人は

何をしてるかとてもきになる（小五・男）

公園で見かける人　場所は、公園。作者は、公園で見掛ける人への關心。

公園で、いつも見掛けるあの人は、何をしてゐる人かと、とても氣になると訝ると言ふだけの歌だが、このやうな關心が人への理解につながるやうです。

生 おはようと振っている手と笑う顔

今日という日の始まり告げる（高一・女）

お早う　場所は學校か。作者は、友人の合圖を見る。お早ようと振つてゐる手と笑ふ顔、たつたそれだけが、今日と言ふ日の始まりを告げるのだと言ふのだが、こんなちよつとした心遣ひが、一日のやる氣の活性劑となるやうです。

11 兒 じゅぎょうちゅう鉛筆の音カチカチと

ノートがきれいにかけている音（小六・女）

鉛筆の音　場所は、教室。作者は、鉛筆の音で、美しい筆記を感じ取る。

律動的な鉛筆の音に、ノートが、綺麗に書けてゐると感じる作者の感性は大事にしてほしい。

生 帰り道君と歩いたこの道を

君をさがして一人で歩く（高一・女）

歸り道　場所は、不明。作者は、同じ道で、過去と現在の違ひを噛み締める。

よくある形（パターン）の歌だが、同じ物も狀況で、總べて、異なるものになるものなのです。失戀の遺るかたない氣持ちは傳はつてきます。

12 兒 赤ちゃんのほっぺたぷにぷにきもちいい

すぐにさわるよぷにぷにほっぺた（小三・女）

赤ちゃんの頬ぺ　場所は、自宅。作者は、赤ちやんの頬ぺを觸つてゐる。

「ぷにぷに」は擬態語。「ぷに」は、やはらかいものを言ふのに「ふにゃふにゃ」があるが、それに彈力を示す「ぷりぷり」といふ語を合成したか。「すぐに觸るよ、ぷにぷに頬ぺた」は、赤ちゃんの活力、可愛さ、將來性などを象徴的に表現してゐます。誰の造語か知らないが、秀逸。

生 告白後私のかわりに泣いた雨

背中を向けて去ってゆく君（中二・女）

去つてゆく君　場所は、不明。作者の告白を振り捨て去つて行く君。

背を向けて去つて行く君に對して、私の代りに泣いた雨とあれば、作者は、涙を堪へてゐたのだらう。思春期の切ない體驗です。少し劇的場面のやうなれど。

13 兒 桜ふる春の野原にねころんで

目をあけてみると桃色の空（小六・女）

桃色の空　場所は、春の野原。作者は、桃色の空（櫻の花の咲く空）を見る。

寢轉んで、櫻の花を長らく見てゐたのだらう。目を閉ぢ、今度開けた時に、網膜に、櫻の花の色が殘影となつてゐたのでせう。ロマンの世界に包まれる一時。

生　黄昏（たそがれ）に微笑む君の横顔に
　　時よ止まれと思う瞬間（高三・女）

君の横顔　場所は不明　作者は、彼の横顔を見る。

黄昏時に、微笑む君の横顔を見た時は、時よ止まれと思ふほどの極美の瞬間であつたと言ふ。思春期の甘酸つぱい幻想なんだろうが、彼女は、極美の彼を見たのです。

14兒　毎日のおふろそうじでふと気付く
　　水のつめたさ冬が近いな（小五・女）

冬が近いな　場所は、自宅の風呂場　作者は、風呂の掃除をしてゐる。

小五の女兒が、毎日の風呂掃除で、冬の到來を知ると言ふのは、日々一家を支へる役割を擔つてゐるからです。さらりと言つて退けたのが救い。

生　仙台の仮設住宅で七夕の
　　短冊飾るボランティアわれ（高二・女）

七夕の短冊飾り　場所は、仙臺の假設住宅地。作者は、七夕の短冊飾りをするボランティアで、地元の人を喜ばせる。

七夕飾りが出來た喜びを詠むか。寂しい假設住宅と花やかな七夕の飾りを對比させて、その寂しさを浮き立たせたか。

15兒　おばあちゃん今日もテレビにもんく言う
　　わたしはいつも宿題に言う（小四・女）

文句　場所は、自宅。作者は、宿題に文句を言ふ。

二人の不滿の共通點は、テレビと宿題とする。お婆ちやんを味方として、一方的な御仕着（おしき）せ（仕着せ。一方的に與えられた事柄）に文句を言つてゐるのです。

個人の自由と社會の規範との相克は永遠のテーマでせう。

生　父と母小さいことでけんかする
　　ぼくと弟はいつも知らんふりする（中二・男）

父母の喧嘩　場所は、自宅。作者は、父母の喧嘩を見てゐる。

親の喧嘩は無力な子供に取つては、迷惑なことで、無難な不干渉と言ふ小さな自己防衛を貫かうとしてゐる。

なほ、初句・三句とぷつりぷつりと切れてゐるのは、作者のうんざりする氣持ちを感ぜさせる。

16兒　渡り鳥人より多く旅してる
　　人よりずっともの知りかもね（小五・女）

渡り鳥　場所は、大空。作者は、渡り鳥を見て人間の知恵について考へる。

小學生らしい非科學的・想像的論理だが、注意せねばならぬ發想でもありませう。

生　組体操小さい身長役に立つ
　　この時だけは自分が主役（中二・男）

組體操　場所は、校庭。作者は、組體操で頂上に立つ。

組體操で小さい自分が主役なんだと誇らしげに言ふ。平生の劣等感が一氣に解消する時です。誰れもが、主役となるチャンスはあるのです。

17兒　いもうととけんかをしててなかなおり
　　ゆめのなかでもけんかをしてる（小二・女）

妹と喧嘩　場所は、自宅か。作者は、妹と喧嘩する。

夢の中でも喧嘩をしてると言ふのは、悔しいけれど、姉なので不本意の仲直りをしたからでせう。願望實現か。

生　目が合えばいったんそらしまた合わす
　　それが私とあなたのヒミツ（中二・女）

秘密　場所は、不明。作者は、彼と目で合圖してゐる。

秘密は仲間だけで通用するものなので、あるいは、作者も秘密の戀をするやうになつたのでせうか。あるいは、親友なのでせうか。樂しい秘密を持つたのです。

18兒　ぼくのゆめロボットづくりをやることだ
　　あぶないさぎょうをできるロボット（小二・男）

僕の夢　場所は、不明。作者は、ロボット作りを希望する。

作者の夢（初句切れ）は、危ない作業が出來るロボット作りだと言ふ。小二の男の子がこのやうな事を考へてゐるとは、時代とは言へ頼もしい事です。

生　黒い雲風にゆられてゆうゆうと

台風つれて僕等の町へ（中二・女）

黒い雲　場所は、作者の町。作者は、黒い雲を見てゐる。ぽつかり浮んだ黒い雲が、己れの欲するままにゆつくりとやつて来る。しかも、この雲は、誰もが拒否出来ない颱風を連れ、自分達の町へやつて来ると言ふのです。「ゆうゆうと」の表現は、人力を見下した自然の力を言ひえて、秀逸。

19兒おばあちゃんきゅうにたおれて目があかず
それでも声はとどいているよ（小三・男）

お婆ちやん　場所は、自宅か。作者は、お婆ちやんが倒れたのを見てゐる。

お婆ちやんは、脳出血などで倒れたのでせうか。目は開けられないが、意識はあるので、聲は届くやうです。

作者の戸惑ひと少しの安堵を絢ひまぜ、呆然と立ち盡す無力な少年の姿が浮んできます。

生一冊の赤いノートに書き込んだ
将来の夢叶えてみせる（中二・女）

將來の夢　場所は、不明。作者は、赤いノートに將來の夢を書き付けてゐる。

書き込んだ夢は不明だが、作者の強い意氣込みは傳はつてきます。夢だけでなく、意志貫徹を祈ります。

20兒つなひきをちからいっぱいひっぱると
こえもいっぱいひびいてくるよ（小一・女）

綱引き　場所は、校庭。作者は、綱引きをしてゐる。

力いつぱいと聲もいつぱいとの合一がより強い力を引きだすと言ふのでせう。聲が力を引き出すのです。

生友達といつものように話すだけ
ただそれだけで感じる幸せ（中一・女）

幸せ　場所は、學校か。作者は、友達と會話をする。

幸福感とは、本人が、感じ、決めることです。この作者は、友人との會話に價値觀を置いてゐるやうです。幸せなる人です。

21兒大空をゆっくり旅する白い雲
ふわりふわりと世界をまわる（小五・女）

白い雲　場所は、不明。作者は、白い雲を見てゐる。

大空を悠然と旅する白い雲は、結局、世界を回るとスケールの大きな歌です。人間の生き方を示唆してゐるやうです。

生あのころの空とは違う青い空
手をのばしても届かないキミ（高一・女）

青い空　場所は、不明。作者は、青い空を見てゐる。

青い空と君とは、手の届かない點において、同等なのでせう。仲の良かつた頃の空と違ふのは、和やかで、手に届きさうに思へた空が、そして、その空のやうだつた君が、今では、手が届かない存在となつてゐるのです。

22兒秋晴れの神社にひびく鈴の音
むねのこどうにほほが色付く（小五・女）

鈴の音　場所は、神社。作者は、鈴の音に胸をときめかす。

鈴の音を聞いただけで胸の鼓動が生じ、頬が赤くなると言ふのは、何か大きな異（神の）世界に入つた緊張感を言ふのか。あるいは、胸のときめく神頼みがあるからだらうか。秋晴れと頬が色付く、鈴の響きと胸の鼓動を對立させたか。

生震災後何もできずに立ち尽くす
あの悔しさが忘れられない（中三・女）

震災後　場所は、被災地〈名取市〉。作者は、己れの無力さに、悔しく思う。

人の力の及ばぬ悔しさは、經驗した人にしか分らない事です。「立ち尽くす」は、手も足も出ぬ無力さを示して、なほ、餘りがあります。

23兒秋祭り太鼓たたいてもり上がる
まめができても本気でたたく（小六・女）

秋祭り　場所は、神社。作者は、太鼓を叩いてゐる。

小六の男の子だが、太鼓の魅力に引き込まれてゐるのでせう。しかし、このやうな太鼓に本氣で打ち込む子がいて、祭りは盛り上るものです。

生身長を今年は伸ばす絶対に
牛乳飲んで早寝早起（中二・女）

身長　場所は、自宅か。作者は、身長を伸ばす努力をしてゐる。

身長を伸ばす決意とその方法を詠んでゐますが、この決意と努力は、報はれる事を祈ります。

以上が八名の選者で選んだ小・中・高生の各賞の歌です。但し、本編の寸評は、本編の爲に、元の稿を出來るだけ切りつめた吉原個人の批評です。さて、皆さんは、どの歌を選び、どのやうに批評をされますか。私達は、理念と目的を持つて、この短歌大會を催してゐます。皆さんも、あなたの心を傳へるために、ぜひ、御應募ください。日本文化の繼承と振興の爲に。

應募方法や用紙など詳細は、
木會東京支部長の谷田貝常夫氏
または、
契沖研究會事務局
〒660-0881
尼崎市昭和通一丁目二―一―30A
重田守康事務局長まで　TEL・FAX06-6401-5246
（よしはら よしのり　契沖研究會會長・園田學園女子大學名譽教授）

縱書きの意識と感覺（その七）

若井勳夫

縱書きで覺え、讀み、書く

俳優の金田賢一氏が仕事の體驗に基づいて、縱書きが國語に適つてゐることを述べてゐる（産經二七・四・一）。（1）テレビドラマの臺本は以前は縱書きであつたが、今は時に横書きが送られてくる。これは、「ちっとも覺えられない」、「頭に入ってこない」、「横に並んだ文字が頭の上を滑ってしまう感じがする」。（2）「横書きだと目の動きが……せわしなく、どこを読んでいるのか分からなくなる」。一方、縱書きは「読んでいる場所の少し下の文字と隣の行と一度に把握しながら読めるし、行の送りも滑らかにできる」。（3）「書くにも縱書きの方が都合がよい……手紙や原稿を書いていても、縱書きの方が言葉が出てくる気がする」。

日々、言葉と付合ひ、言葉によつて人間を演じてゐるだけあつて、實感的、體感的な國語論として貴重な發言である。（1）は國語の文字の流れは天から地へ、上から下へ續いていく。首を縱に振り、頷いて腑に落ちていく。書く流れがそのまま讀む流れとなる。

横書きは、まづ運筆が一字ごとに斷切し、次に下へ行く力を避けて無理やり横へ行かうとする。從つて、縱は文字が自然に頭に入るが、横はぽつぽつ切れて一連の流れとして把み取れないのである。（2）は縱の一行を上で定めるとそのまま下へ降りて行け、右から左への自然な進行で、次の行も目に入る。視野は一、二行の狹い上下の線である。しかるに、横は視野が左右に廣がり、見え過ぎて焦點が定まらない。文字が下へ行かうとするのに、それに逆らつて右に出て行かざるを得ず、視點が絶えず動いて落着かない。（3）は書道の筆の動きを省みれば明らかである。縱は書き手の下へ（内へ）向ひ、つまり心に向つて、自己の「内面の聽き手」と對話して思考しながら書き進める。また、縱は書き行く左側は白紙で、これから文章が及ぶ先であり、言葉が創造され、展望が開かれる。一方、横は一字ごとに寸切りのやうに斷たれ、流れは下に落ちずに脇へ餘り出る。これを逆に言へば、アルファベットを縱に書いて讀むやうなものである。さらに、右へ逆行するだけでなく、書かうとする下は手に隱れて見えず、行く先が閉ぢられてゐる。これでは會話、

傳達の段階ならまだしも、思考、認識の言語として深まることはない。

以上の通り、言葉の實踐者側の意見はさすがに眞實をついてゐて、國語學的にも説明し、納得できるものである。なほ、金田氏に縱書きについての拙稿をお送りしたところ、「縱と横を研究していくと、なかなか興味深いものがありました」と返事をいただいた。

神社の注連縄と寺院の聲明講・曼荼羅

京都の上賀茂神社に攝社・末社が二十四社鎭座してゐて、それぞれの神社の傍らに注連縄で圍まれたところがある。それを權地（ごんち）といひ、權殿を設ける場所である。御殿の建替へや修理の時に、ここに假殿を建て神靈を遷す。普段はこの權地に注連縄が張られてゐるが、これは「北西より時計廻りで四方に閉められ……鳥居の注連縄と同じお飾りがなされる」（同社「葵だより」二十、二七・六）。北でなく、なぜ北西から始るかは不明であるが、時計廻りであることに注意すべきである。これは今まで述べてきたやうに、文字の書き方で言へば、縱書きの方向なのである。

また、京都大原の三千院で「御懺法講（おせんぼうこう）」といふ法要が營まれ、お經を讀む聲明の後、堂内を廻つて紙の花びらを撒く散華が行はれた。この本堂内で僧侶は本尊を中心にして向つて右から左へ廻つてゐる（京都二七・五・三一）。これまたやはり時計廻りの縱書き方式なのである。

このことは曼荼羅の繪圖についても當てはまる。密教の「金剛界曼荼羅」は九座あり、眞ん中の大きな一座が中心に位置する。この中央から下へ、そこから向つて左へ、そして上へ上つて時計廻りに外枠の座を一周する。この金剛界の構圖の宗教的な意味についてはよく分らないが、少なくとも視點の動きは神社や寺院で見られる時計廻りと同じであり、そこに縱書きの原理を讀み取ることができるのである（なほ、「胎藏界曼荼羅」は中心から外へ四方に向つて開かれていく視點の動きとされる）。宗教界におけるこのやうな時計廻りの動き方についてはたびたび述べてきたが、日本人の意識、感覺の根柢に縱書きと共通する內實があるのではないだらうか。

下へ讀み進めるスマホの縱スクロール漫畫

スマートフォンで縱の流れに沿ひ下へ向つて漫畫を讀んでいくのが若い世代に人氣がある（京都二七・六・一九）。これを「縱スクロール漫畫」といひ、スクロールとはスマホの一畫面に入り切らない情報を見るために、畫面を上下左右に動かすことである。では、どのやうな操作かといへば、漫畫を讀む（見る）時、指で畫面を上へ滑らせると、繪は下から上へ出てくる。これはインターネットと同じことで、いはばページを上にめくつて、上から下へと讀む。つまり視點を上から下へ向け、下へ下へと讀み進める。しかも吹出しの科白は縱書きである。機器の內部では畫面が下へ繋がつてゐる。讀む時もすべて縱の一直線に下へ降りていき、「親指を滑らせながらすいすい読める」。漫畫の作者は「縱スクロール漫画は流れるように読み進めてもらえるはずなので、読む人の気持ちやリズムを意識して描いている」、「縱の流れを時間の経過として表現できる」と、縱書きの本質を明確に語つてゐる。

一方、「横スクロール漫畫」もある。指で右へ滑らせると、畫面は右へ出てくる。そして、その繪は右から左へと進み、視點もそのやうに向ける。科白はやはり縱書きである。紙の漫畫の齣は上から下へ、右から左への進み方を混へてゐる。いくら情報社會が進化しても漫畫の描き方、讀み方は根本的にその影響を受けず、縱書きの法則に基づいてゐるのである。

バスガイドの觀光案內の手引き書

この夏に鹿兒島交通の觀光バスで薩摩半島を巡つた。ガイドは二年目で、三月に入社した新人の研修生三人が同車して實習した。最前列に坐つてゐたので、研修生の動きがよく分る。ここで觀光案內を説明する文章が載る、社內で作つた手引き書（教則本）が廣げられてゐるのが何回も見られた。それはパソコンによる入力で印刷されてゐて、何と縱書きであつた。その上、ページ番號は算用數字ではなく、漢數字で略さずに、例へば「二一」ではなく、「二十一」と正格で記されてゐた。今の時代の風潮から若い女性には横書きの文章がふさはしいと思はれよう。しかし、さうではなく、なぜ縱書きなのだらうか。これは前述の通り、縱であるからこそ讀みやすく、頭に入りやすく、理解しやすく、覺えやすいからである。その作成擔當者はこのことを十分に承知して、横を縱に變換して、端然と整へたのであらう。ただ、研修生の自筆の手控へのノートは横の罫線入りで、横書きであつた。これはある面では仕方がない。縱書きのノートは小學生の國語ノートはあるが、學生、一般用は搜し廻らねばならないのが現狀である。

以前、縱書き論の拙稿を當時、本會の會長であつた宇野精一氏にお送りした。その返書に國語の縱書きは慣れであると思ふと書かれてゐた。しかし、これは決して單に慣れ、慣用だけではない。本來、國語は縱に書き、縱に讀み、縱の流れで理解してきた。この長年の方式が日本人の根本的な言語理解、言語表現の基底をなして、言語意識や言語感覺を培ひ、精神や行動のあり方にまで及んだ。この蓄積を經て縱書きが傳統的な正則として定着したのである。

（わかゐ いさを　京都產業大學名譽教授　本會理事）

日本文藝復興の提唱（二）

書き言葉としての文語の活用

市川　浩

口語體から文語脈排除の現狀

前回まで口語體の新しい展開の爲に、書き言葉の本流たる文語の活用を主體とした文體の創製を提案して來たが、これは特に新しいことではない。事實草創期の口語體は文語體との共生に據る所大であり、文章の中に文語表現が隨所に見られた。從つて「文語の活用」は一種の原點復歸で容易に實現可能に思はれる。しかし當時の文語脈は細部の描寫工夫の一端に止り、前述した萩原朔太郎の指摘する問題點は未解決の儘である。

一方で文語と口語を意圖的に別扱ひとする動きが次第に大きくなり、昭和十七年には文語體の學習は小學四學年からといふ理由から、同三學年の教科にあつた文語詩「春の小川」が口語體に改訂となつた。このやうな姑息の行政措置は當に敗戰への道程の象徵とさへ言へるものであるが、不幸にも戰後は之が更に教條的となる。卽ち、昭和二十七年四月四日附の內閣閣甲依命通知「公用文作成の要領」では、「第二・文體について」に於て、「文語脈の表現はなるべくやめて、平明なものとする」とあり、（注）には具體的に事細かに口語化を規定した。

これは、講和條約發行を目前にした占領軍の置き土產なのか、當時建議機關であつた國語審議會の暴走なのか、不明であるが、爾來六十有餘年、途中「常用漢字」、「現代仮名遣い」など幾つかの名稱變更の單なる讀換への他は、漢字かな交り文を前提とする文部大臣言明など國語政策の變更は全く反映することなく今日に至つてゐる。而もこれは內閣內部の規定にして法律に非ず、一般には強制せずと言ふも、最近では電筆に於ける日本語入力に文語表現が混入するや忽ち赤の校閲波線が出現する程に、口語體から文語脈の排除が民間にまで滲透してゐる。

口語體への文語活用の問題點と對策

かゝる現狀の下、現代口語體の基本問題を解決する手段として文語の活用を考へる上で重要な次の三つに就いて問題點と對策を述べよう。

一　終止形の文語化

二　カタカナ語の國語表現

三　歷史的假名遣の保存

一　終止形の文語化

剱太郎のいふ「ネバ〳〵した文體」の正體が口語體に於ける終止連體同形にあることは前述の通りであり、その解決策として、終止形のみ文語形とすることを提案したのであるが、具體的には活用形の種類により次のやうな問題と對策が考へらる。

四段型　文語でも終止連體同形であり、現狀通り
カ變型　文語化　春が來　早く來べし
サ變型　文語化　創造す
ナ變型　例外として連體形を文語化　死ぬる思ひ
ラ變型　未然形と同形の爲、文語化困難、現狀通り
一段型　文語でも終止連體同形であり、現狀通り
二段型　文語化　得　老ゆ　但し、四段型假定形から生じたものは文語化しない　育つ　育てる
形容詞型　文語化　賢し　美し
形容動詞型　口語唯一の終止連體別形であり、現狀通り
助動詞　文語化可能　る　らる　す　さす　しむ　たし
例外として連體形を文語化　參りまする　折

結論として口語體の代表的終止形である「だ」、「である」、「ゐる」、「た」、「です」などで終止連體別形を實現できず、問題の解決を先送りする嫌ひもあるが、一方その分、比較的穏やかな出發とも言へよう。

二　カタカナ語の國語表現

明治期に歐米文化の洗禮を受けた我が國の知識人は懸命に歐語の國語譯に注力し、主に漢字二乃至四文字による熟語は、その文化を全國民的に吸收理解せしめることができただけでなく、今日大陸の漢土にも輸出されてゐる。しかし戰後の過度の漢字制限と、一方表外字の無制限に近い「常用漢字」書換へにより、造語能力及び字面からの內容理解力の低下を招いてゐる。戰前には殆どなかつた情報通信技術の用語が、殆ど英語をその儘片假名表記する爲、一般人には理解できないのは極めて危險と言はざるを得ない。幸ひ業腦（パソコン）初期を過した僅かな經驗を基に漢字熟語化の例を茲に提案す。但し當面これら漢字熟語は書き言葉として用ゐ、音讀、會話にて原語の讀みを容認するものとすべきであらう。例：電簿（ファイル）

file 電簿、folder 簿册、drive 驅動簿幹、system 簿系
click 扣釦（ぴっぴっ）、mouse 指鼠（しそ）、hard disk 固定記憶盤
data 記錄情報、hacking 偷簿（とうば）、cyber war 諜簿戰（てよばせん）

三　歷史的假名遣の保存

國語の書き言葉として永年の研鑽を積んで來た文語體を口語體から峻別することで、後者の發展に必要な養分補給路を斷つてしまつた半面、寧ろ文語體は「國語改革」の波を免れ、その文法及び歷史的假名遣を保存し得た效果も忘れてはならない。無論昭和二十一年告示の最初の「現代かなづかい」のまへがき、昭和六十一年「現代仮名遣い」の前書きも共に「この假名遣は主として現代文のうち口語體のものに適用する」と明記してゐることも與つて力があつたのも事實であるが、問題は「主として」といふ文言である。これを理由に文語體にも適用可能とするの無理は國語國字第百九十三號（平成二十二年）に拙稿「正字・正かな運動實踐のために」で論じてあるので御讀み頂きたいのであるが、これを擴大解釋したのが短歌界で、口語短歌ならまだしも、文語體の歌にも現代假名遣を容認したのである。

かうした經緯を考へると、現代の新文體として文語脈の活用復活といふ折角の試みは、惡くするとこれらに現代假名遣が適用されて、その延長として、正規の文語體の假名遣までが潰滅してしまふ危險性を孕んでゐる。これは絶對に避けねばならない。

その爲、新文體の基本前提は歷史的假名遣であることを強調するのは無論であるが、その名稱に於て「文語」を含有せしめることにより、「現代文のうち口語體のもの」ではなく、從つて現代假名遣の適用を受けぬことを明示すべきと思ふ。「新文語體」、「現代文語體」、「通用文語體」、「文語活用體」などが考へられよう。

四　結　語

以上現代口語體の改善に就いて拙論を述べて來たが、その方法として文語の活用を思ひ附いたのは、既述の通り萩原朔太郎の詩で文語への回歸を知つたからであつた。日常の書き言葉の世界で文語への回歸があるとすれば、どのやうなものであるべきかと愚考しての提案、御叱正、御助言を賜れば幸ひである。

（いちかは ひろし　㈲申申閣代表、本會常任理事）

言葉の文とり

谷田貝常夫

「きれいは穢い、穢いはきれい」

「マクベス」の幕があくと雷と稲妻の中、三人の魔女が登場し、この科白を唱へて霧に消えます。その後マクベスが登場して来て始めて口をひらき「こんないやな、めでたい日もない」といふ、魔女達に劣らぬ奇妙な言葉を吐きます。觀客は戸惑ふと同時にこの劇の展開に緊張感をおぼえるといつた效果がそこに漂ひます。

賢愚經

これは佛教の御經といふより、賢者や愚者の話を集めた一種の說話集で、東大寺に傳來したため聖武天皇の宸翰（御筆跡）との傳承があり、その經本は國寶にまでなつてゐます。ここに使はれてゐる「賢愚」といふ言葉は、「賢い」と「愚か」といふ反對語をならべて一字になつてゐる言葉ですが、この語、もう一つ別の意味も考へられます。つまり大和言葉にすると「かしこいばか」となり、つまりは「りこうばか」とも取れるものです。この「利口馬鹿」は辭書にも登錄されてゐて、自分では利口のつもりでゐても、人からは間抜けた行動をしてゐるやうに見えることを意味します。「學者馬鹿」といふ言葉もあつて、一般には、智能指數は高いが、常識となるとまるきり駄目な人、自分ではそのことがわからない人のことを指します。

このやうに、まるで正反對の意味の言葉（對義語）を強引に一つに結びつけて一つの單語にするので「對義結合」と呼ばれる語法ですが、このやうな用法に名前をつけたのは古代のギリシャ人でした。そのオクシモロンがそのまま英語 oxymoron になつて、日本では「矛盾語法」と譯されてゐます。

世界一よく出來たオクシモロンは何か、それがこの「矛盾」だといつてよいでせう。日本人なら誰もが自家藥籠中のものとして、「お前さんの言つてゐることは矛盾だらけだ」などとよく使ふ單語ですが、その中國由來の語源は御存じでせう。攻擊のための武器と守るための武器が同居してゐるわけです。

話が少し横道にそれますが、「利口馬鹿」の馬と鹿は反對語とは言へないにしても、秦の權臣が皇帝に「鹿」を「馬」と言つて獻上したら、群臣は權勢におもねつてその矛盾に反對しなかつた、それが「鹿を指して馬となす」といふ成語になり、バカの語源とされたものです。しかし、鹿を〔カ〕と讀むのは和語であつて、昌は〔ロク〕、愚者の〔バカ〕とはなりません。元は印度の梵語からきたもので moha〔モハ〕、馬が〔マ〕とも〔バ〕とも讀まれ、海が〔ハイ〕とも〔カイ〕とも發音されることからも、〔バカ〕の音が出てきたものです。無智を指し、佛僧が人を貶しめるやうな言葉、愚か者を使ふ譯には行かないので、隱語のやうに〔バカ〕と言つたものとされてゐます。俗界の人にはわからない言葉でした。人前で「あの人は御利口な御〔バカ〕さんですね」とは大聲で言へたわけです。

「公然の秘密」といふオクシモロンの慣用句があります。表向きは秘密にされてゐるが、實は誰でも知つてゐることを指します。內外を問はず政治家に多いのが秘密な筈の「隱し子」です。以前のある政黨ではその長であつた政治家が二人とも「隱し子」のゐたことを公表しましたが、これは秘密を公然にしたものであるにしても、その後の隱し子がどうなつたかは內密にされてゐるやうです。

大人子供・子供大人

反對語を強引に結びつけて一つの單語にする矛盾語法・オクシモロンは、しかし、水が酸素と水素に分解され得、逆に水素と酸素が化合して水になるといつた可逆反應が起るとは殆どないやうです。「利口馬鹿」とはいつても、「馬鹿利口」といつた單純な逆接の云ひかたはなささうです。しかしよくしたもので「愚直」といふ言葉があります。「馬鹿正直」、つまり氣がきかない愚か者の意味ですが、果してそればかりだらうか。方丈記の最後の方に「たもつ所はわづかに周梨槃特（パンタカ）が行にだも及ばず」といふ文が出てきます。鴨長明は、愚か者と人に言はれた周梨槃特、お釈迦様の弟子でしたがどれほど愚かだつたかといふと、まづ自分の名前が覺えられない、ましてやお釈迦様が覺えるやうにと言つて授ける短い呪文・偈がどうしても覺えられない。かう聞くとどこか安心する人が出てくるのではないでせうか。物覺えのわるい筆者なども仲間意識を持つたものです。鴨長明にもその氣があつたのでせうか。日本ではつひに茗荷と結びつけて物忘れネタの落語にまでなつてゐます。そこで御釋迦様、パンタカに箒を持たせ、毎日「塵を拂はん、垢を除かん」と唱へて掃除をするやうに云はれます。それを守つて掃除をし、心の塵も拂つてつひにはパンタカ、悟りを得て皆から聖者と云はれるまでになりました。餘りにも有名な話ですが、つまりは「利口馬鹿」の逆を行つたも

ので、「馬鹿利口」とでも表現される事例です。賢愚もあれば愚賢もあり得るのです。

「大人子供」といふ語もあります。「あいつは大人になつても子供と同じだ」といふ意味で、藝術家などに見られるものです。いつまでも精神年齢が若くて成長がある一點で停つてしまつたと見える人です。いはゆる童心を持ち續けてゐるわけで、一概にわるいことだとは言ひきれません。

その逆に「子供大人」とも言へる、子供なのに大人のやうな振舞をする、「大人びた子供」もゐます。江戸幕府には「若年寄」といふ役割があつて、最高位の老中に次ぐ要職を意味してゐました。若旦那、若大將、若おかみといつた類の「次」の意味からなのでせうか。しかしこの「若年寄」にはオクシモロンとして使はれることも多く、「若いのに年寄りじみたことを言つたり、したりする者」あるいは「老むさい若者」の意に使はれます。

遠くて近きもの

遠いのに近い、とは。このやうな矛盾する單語を結びつけた表現、オクシモロンはいつたい日本では何時頃から使はれるやうになつたのだらうか、禪宗が始めだつたに違ひないと思つてゐました。「不立文字」といふ書跡を見たりすると、「悟りは文字からは得られない」といふ矛盾そのもののポスターを見せつけられる思ひで、目眩さへしてきます。

ところがこの「遠くて近きもの」の段が『枕草子』にあるのに氣づきました。そこには「極樂、舟の道、男女の仲」とあります。十萬億土といはれる程遠くの極樂、何の關係もなかつた男女の間柄が、意外に近いもので、極樂に生れ變つたり、意外に結ばれ易かつたりします。

一方でその逆をいく「近くて遠きは男女の仲」といつた慣用句もあり、『蜻蛉日記』などを見ても、結婚はしてゐても互ひに遠い存在になつてゐることなど、すでにして平安時代に實感されてゐたでせう。日本人はかういつた論理を越えた現實を、矛盾語を結びつける表現によつてよく理解してきた、或いはそのやうな表現をすることで己れを納得させてきたのだといふ氣がします。

ありがた迷惑

有難い感謝すべきことなのに、迷惑だ、とは？ 今く怨氣がないどころか、相手のためを思つて善意からしてあげたことが、實際には相手に迷惑をかける結果になることを二語で表現した矛盾語法です。たとへば、本人に内諾でその人の寫眞を美人コンテスト審査會に送つたところ、入選して候補者に選ばれた本人が、自分は有名になりたくないと思つてゐるお堅い女性だつたら、本人のためと思つて寫眞を送つてしまつたことが、「ありがた迷惑」になるわけです。

蟲眼の引倒し

夏目漱石は小説の中で、「三四郎は日露戰爭以後こんな人間に出會ふとは思ひもよらなかつた」と書く。「しかしこれからは日本もだんだん發展するでせう」と辯護した。すると、かの男は、澄ましたもので、「滅びるね」と言つた。「とらはれちやだめだ。いくら日本のためを思つたつて蟲眼の引き倒しになるばかりだ」。この言葉を聞いた時、三四郎は眞實に熊本を出たやうな心持がした。

蟲眼・ひいきとは、「ひき」の延音で、氣に入つた人やことに助力することを言ひますが、このヒキといふ同音を繰返したオクシモロンは、そのことが却つてその人の迷惑となるといふ意味であり、「ありがた迷惑」の一種といへます。

政治の世界では「ほめごろし・褒め殺し・譽め殺し」といふ恐ろしい言葉がはやつたことがあります。ある政治家を褒めることで、その政治家をだめにしてしまふことを指しました。蟲眼の引倒しと同じと言へますが、こちらは駄目にすることを目的としてゐるわけでなく、うまく行くだらうと蟲眼したことで悪い結果をもたらすことを言ひますが、「ほめ殺し」は駄目にすることを目的として褒めるといふことから「殺し」といふおぞましい用語が使はれたのだといへませう。

失敗は成功の基

この言葉は完全な「矛盾語法」で、試行錯誤をかさねてこそ、成功の榮冠が得られるといふお固い教訓である一方、失敗を恐れては成功も望めないといふ積極的な勵ましの言葉をともなつてゐます。特に科學の世界では、今までにない事象を考へつくこと、誰も思ひつかないことに手をつけることが成功となるので、失敗から成功の種を見つけやすいものです。

プラスチックは腐らないことを前提に開發されましたが、後で分解し土に還るプラスチックがあります。牛乳から作るカゼイン樹脂がその一つですが、これは或る化學者がホルマリンの容器を持ち歩いてゐたとき、誤つて犬に與へる牛乳の中にこぼしてしまひました。ところがそれがかたまつて固形になり、強靭で透明にもなり、着色もできて削るのも容易といふ優れた特性をもつ樹脂になつたので、印鑑や釦に作られるやうになりました。

エジソンも失敗の連續でしたが、そこはエジソン、「私は失敗したことなどない、うまくいかなかつた一萬もの遺り方を見つけただけなのだ」といふ名言を殘してゐます。うまくいかなかつたとは、失敗だつたといふことではないかとも言へるでせうが。

負けるが勝

これは、本當は勝ちたいのに負けてしまつた側が、それを負け惜しみに吐く科白ではなく、もつと深い道理を含んだ矛盾語法です。すなはち、相手に勝ちを讓つて、敢へて爭はないのが、大局的には有利な結果になる、といふ「戰法」なのです。負け逃げて、逃げて相手の補給線がのびきつたために勝ちを收めた例も多々あります。

窮すれば通ず

追ひ詰められたり、行き詰つたりして絶體絶命の窮地に陷れば、却つて活路が開かれるといふ意味に使はれます。「窮鼠、猫を嚙む」とも言はれます。

「必要は發明の母」となると、「窮すれば通ず」の論法に沿つた西洋の諺となります。「必要」とは、現在存在してゐないので不便だと感じられることです。英語の "want" が、「缺けてゐる」といふ意味から、「欲しい、必要だ」の意味になつたことと似てゐます。

大欲は無欲に似たり

「大欲」の反對語は「小欲」になるはずですが、その一段上をいつて「無欲」をもつてきてゐるこの言葉には、二つの逆の解釋が成立ちます。「人望を抱くものは些細な利益にこだはらない」が第一義。「欲が深か過ぎると、欲に目がくらんで損を招くことが多く、無欲と同じ狀態になる」が第二義。

佛教は欲望を抑へつけようとする宗教のやうに思はれがちですが、弘法大師は大欲を持てといふ御經「般若理趣經」をとても大切なものとしてゐました。中に「人欲得清淨／大安樂富饒」といふ句があります。大欲を持つことで清淨となり、衆生を大安樂、富饒とすることができる、といふのです。とは言へ、弘法大師空海の大欲は宇宙規模のもので、凡俗のはるか上を行くものでした。

（やたがひ つねを　國語問題協議會 事務局長）

日中英言葉の雜學（十）

高田 友

健太：「字音假名遣」つて、何ですか。「現代假名遣」と「歷史的假名遣」の外に、別の假名遣があるんですか。

高田：「字音假名遣」といふのは、漢字の音讀みの假名遣のことだよ。定義がいささかはつきりしてゐないのだが、通常は「歷史的假名遣」のうちの音讀みのことを言ふ。「共産黨委員長」だつたら、「きようさんたうゐゐんちやう」が字音假名遣だ。

健太：「共」は「きよう」ですか。「きやう」ぢやなくて。

高田：現代假名遣で、「きよう」となる漢字は、字音（歷史的）假名遣では、「きよう」「きやう」「けう」「けふ」の四つがある。（後で、「くゐやう」が出て來ることに注意）少し例を擧げると、次のやうになる。

キヨウ　共・供・凶・恐
キヤウ　京・強・狂・鄕（「キヤウ」が一番多い）
ケウ　喬・叫・敎・僥
ケフ　夾・狹・協・脅

健太：古い中國語の發音に似せて作つたんですよね。

高田：さうだね。日本に入つて來た頃の中國語の發音も今ではかなり推定できるやうになつてゐる。その發音と假名遣の對應關係については、もう隨分說明したよね。

健太：「文語の苑」（「國語問題協議會」の姉妹團體）が發行した「日本語はこんなに美しい（文語名文百撰）」を讀んでゐたら、「南」のルビが「なむ」となつてゐました。「む」で終るなんてことがあるんですか。それに、僕がちよつと囓つた所では「水」は「すゐ」のはずだつたのに、「すい」となつてゐました。頭が混亂して來ました。

高田：古代の中國語の發音の研究が進んだ結果、從來使はれてゐた字音假名遣を修正する必要があるといふことが分つて來たんだ。

健太：以前の假名遣を憶えた人は、無駄になつたのですか。

高田：そんなにひどく違つてゐるわけぢやないから、努力が無駄になつたといふことはないよ。もつとも、僕も、昔は、そんなものが存在してゐるといふことを知らなかつた。國語問題協議會から「平成疑問假名遣」といふ六百ページに及ぶ大作が出てゐて、ここで懇切丁寧な解說がしてある。著者は、高崎一郎先生だ。

健太：從來の假名遣も、その假名遣も、どちらも「字音假

名遣」と言ふのですか。

高田：うん。さう言つていいだらう。

健太：僕は、和語の歴史的假名遣は大體憶えました。字音は、どちらの假名遣を憶えたらいいでせう。

高田：それは「あむ」のタイプの方だね。こつちを憶えたら、從來の歴史的假名遣は自然に解るやうになつてゐるから。

健太：どちらも字音假名遣であるにしても、識別のためのそれぞれの名前はないのですか。

高田：高崎先生は、從來のものを「舊假名遣」、「南」を「なむ」と讀む假名遣を「正假名遣」としていらつしやる。今日は「舊字音」「正字音」と呼ぶことにしよう。

健太：「正字音」では、「ん」は全部「む」になるのですか。

高田：さうぢやない。發音が「ん」で終る字音のうち、特定のものが、その「ん」を「む」と書く。「金」は、韓國では「キム」になるといふことは知つてゐるね。

健太：韓國では四人に一人が「キムさん」なんですよね。

高田：漢字は、中國の南方から朝鮮を經て日本に入つて來たといふ說が有力なんだ。中國のどの地方よりも、韓國の方が、漢字の讀み方が日本語に近い。韓國に訓讀みはないから、もちろん音讀みの話だが。

健太：すると、「金」の正字音は「きむ」なんですね。

高田：うん。實際に、古い文獻では「きむ」と書いてあるものもある。いふまでもないが、古代中國語では、kim と發音してゐたといふことだよ。kin ではなくて。

他に「竜」は舊字音では「えん」だが、正字音では「えむ」。「庵（あむ）」「俺（えむ）」も「む」で終る。意外なことに、「三」も「さむ」。古代中國では sam。

健太：それは聞いたことがある。「三位」を「さんみ」と讀むのは、「さむ」の「む」が殘つてゐるんですね。

高田：さらに、m と b は發音するときの口の形が似てゐるから、「三郎」は、「さむ」の m が b に變つて、「さぶらう」。正字音が「む」で終る漢字の一例を示して上げよう。まだまだ、他にも澤山あるんだがね。

炎、焰、竜、甍、鑢、厭、音、函、甘、敢、臨、咸、碪、金、禁、禽、今、兼、欠、三、芟、斬、心、寢、針、森、壬、尋、甚、僉、籤、陝、占、尖、閃、潛、賸、朕、沈、賃、曇、貪、男、南、犯、凡、範、貶、林、嵐、妄、廉

しかも、正字音は、同じ音符がついてゐるものは、たいてい同じ理窟が成り立つ。つまり、「焰」が「えむ」だから、旁（つくり）が同じ「陷」も「かむ」だといふ理屈だ。

健太：「僉」が「せむ」だから、「劍」も「けむ」になる？

高田：さうだね。「籤」が「せむ」だから、「纖」も「せむ」。

健太：ところで、「僉」つて、どういふ意味ですか。

高田：「みんな」といふ意味だ。「僉議」と言つたら、「みんなで議論する」といふことさ。ついでに、「咸（かん）」も「みんな」といふ意味。パーツが同じ「感」も「かむ」。

健太：「公卿僉議」といふのは、公卿の總會のことなんだ。

窺つてゐるうちに、正字音の理窟が分つて來ました。「む」で終るもの以外には、どんなのがありますか。

高田：一番多いのが、この「む」で終る字。後はみんな「ゐ」と「ゑ」にかかはるものばかりなんだ。さつき、君の言つた「水」だが、舊字音では、「水」「類」「追」などは「すゐ」「るゐ」「つゐ」となつて、「ゐ」が出て來る。

健太：正字音では、「すい」「るい」「つい」になるんですね。

高田：うん。どうも、古代中國語の發音では語尾が i だつたやうだ。ui でも wi でもないから、「うゐ」と書く必然性が認められないといふわけだ。

健太：他にはどんなものがありますか。

高田：「すい」の場合とは逆に、「貴」は「き」でなくて「くゐ」になる。これは古代中國音に ui があることから來てゐる。現代北京語でも、「貴」は gui といふ發音だ。「くゐ」「ぐゐ」と書いて「き」「ぎ」と讀むのだが、その例を竝べてみよう。

くゐ　危　詭　跪　毀　麾　虧　軌　揮　輝　徽　貴

ぐゐ　鬼　愧　歸

ぐゐ　魏　巍　僞

健太：かういふ所が日本語の魅力なんですよね。それがややこしいからいけないといふ人の氣が知れない。。

高田：他には、「外」が面白い。舊字音では、《漢音》は「ぐわい」、《呉音》は「げ」。正字音では、《漢音》は「ぐわい」のままだが、《呉音》は「ぐゑ」になる。

また、「血」は「くゑつ」、しかし、間違へてはいけないのは、缺は「けつ」であつて、「くゑつ」ではない。ところが、同じ「夬」がパーツにあるのに、「決」は「くゑつ」。こんなややこしい所はほんの一部だがね。

また、「けん」といふ發音の漢字は、舊字音では、必ず「けん」になる。「建」「兼」「犬」はいづれも「けん」。

ところが、正字音では、「建」は「けん」、「兼」は「けむ」、犬は「くゑん」。つまり、舊字音が「けん」であつても、正字音は「けん・けむ・くゑん」と分かれる。ま

た、正字音では、「元」「原」「源」「玄」の《漢音》は「ぐゑん」になる。

同じ類だが、「圭・惠・慧・携・兄」は「くゑい」。

結局、整理すると、正字音が舊字音と違つてゐるのは、次の三つの場合だけだといふことになる。

（1）「ん」が「む」になるもの。

（2）「き」「ぎ」「け」「げ」が「くゐ」「ぐゐ」「くゑ」「ぐゑ」になるもの。

（3）「すゐ」「つゐ」「るゐ」「ゆゐ」が「すい」「つい」「るい」「ゆい」になるもの。

字音假名遣には、それなりの理窟がある。論理に隨つて考へれば、それほど惱まなくても、習得できるはずだ。

さつき、現代假名遣で「キョウ」になる漢字の字音は、「きよう」「きやう」「けう」「けふ」の四つがあると言つたが、實は正字音では、もう一つ「くゐやう」がある。結局は、右の（2）で說明できるのだが。

健太：「くゐ」が「き」で、それに「やう」が付くから、「きやう」と同じだ。どんな漢字があるんですか。

高田：「狂」「誑」「匡」「框」「兄」「況」。主な漢字はこれだけ。「王」と「兄」が音符になつてゐる。いづれも舊字音では「きやう」なんだがね。結局、「兄」は《漢音》は「くゑい」で、《吳音》が「くゐやう」といふことになる。

例外的に、「渟」（沼地のこと。舊字音では「きよく」）の一字だけに當て嵌る「くゐよく」といふ假名遣もある。

健太：習得するのはそんなに大變でもなささうですね。

高田：岩波文庫の「日本書紀」は、正字音を使つてゐる。これからは、正字音が學界の大勢になりさうだ。

もう一つ、例外的なものは、「榮」と「永」の《吳音》である「やう（舊字音）」が「ゐやう」になることだ。

健太：臨濟宗を傳へた榮西は、「ゑいさい」の外に「ヨウサイ」の讀みがあります。これが「ゐやうさい」なんだ。

wiyau の w が脫落して iyau になり、i が y に吸收されて、yau になつたと思へば難しいことはありませんね。「兄」《吳音》の「くゐやう」はその前にKが附いただけなんだ。

高田：古代推定中國音では iiang だつたのを、古代日本では wiyau で受けて、それが yau になつたのさ。

讀者が正字音をお使ひになる場合は、前述の高崎先生の御著書で確認して下さい。字形から想像できるとは言つても、例外もかなりありますからね。

（たかだ いう　塾講師）

平成四十五年

高崎一郎

平成十三年には二種類の「舊曆」が流通した。市販の高島曆で、版元によつて日付の食違ひが生じたのである。幸か不幸か社會的な混亂はほとんどなく、ただ「結婚式場が當惑」といつたベタ記事が新聞の片隅に載つたといふ。

理由は時差にあつた。たとへば東京と北京では時計の針が一時間異る。舊曆には日付變更線といふ考へ方がないから、この一時間の間に月や太陽の運行が何らかの局面を迎へると東京における「昨日」も、北京では「今日の出來事」となる。つまり兩地の曆で日付のずれはじつはしばしば起る。どうやらある版元が「中國は〝本家本元〟だから間違なからう」と、計算もせず中國の曆本をそのまま引き寫したのが騷ぎの原因であつたらしい。

「車軌を同じうす」の言葉で知られるやうに、曆法や度量衡といつた社會生活に大きな影響のあるものは、時の政府が何らかの制度を設けて管理するのが常である。日本では明治六年にグレゴリオ曆が採用され、それまでの天保曆は「公的には關知しない」ことになつた。つまり高島曆の類は「民間で勝手に計算した表」に過ぎないのである。かつて尺貫法が禁止されたのと同樣、行政上の混亂を避けるためには賢明な措置といへる。

この天保曆は近い將來、破綻する事がわかつてゐる。計算上、平成四十五年には九月の次に十一月がくる。古來このやうな矛盾が生じた時は改曆といふ名の微調整、今風に言へばメンテナンスがその都度實施されてきた。今回もいくつか改善提案はあるものの、最大の問題は最終的に誰の名で「改曆」をするかにある。

ちなみに中國の舊曆も清朝以來の衍用であるが、日本と多少計算の異るところがあるためたまたま同樣の破綻は免れた。また舊正月や端午の節句が國定の休日であるため、毎年の該當日を計算する擔保として、舊曆が國家で管理されてゐる。この差はじつに大きいといへる。もしも天保曆の破綻を乘り越えるための意見統一に失敗した場合、〝本家本元の中國〟から曆法を下賜してもらひ、あとは時差だけ考慮するのが安易ながらはるかに「安定」

する事になる。日付が一致する事こそ、暦の最も大切な役目だからである。

近ごろまた舊暦が見直されてゐると聞く。しかし「日本古來の季節感」といつた情緒ばかりが先行し、「現代のインフラストラクチャー」としての意識に薄いやうだ。あまり本氣で復活を考へてゐるわけではないのかもしれない。たとへば冒頭の「時差があれば現地における日付は異るかもしれない」といふ現實を現代人に受入れてもらふのはなかなか容易ではない。繰返しになるが、日付が一致する事こそ暦の最も大切な役目である。

この種の問題は研究が深まるにつれて意見が分散し、遂には對立する例が珍しくない。研究とはそもそも假說を立てるものであつて、しばしば今日的な問題解決を妨げるのである。暦とは何のために存在するのか。もちろんそれは明日の豫定のためであつて、日月の運行を研究する手段ではない。

できれば片足でもよいから、公的な立場を確保し續ける事は意見集約のため何より大切だと感じる。幸にも尺貫法の一律嚴禁が支持された強權の時代は去り、自分の考へ方を細大漏らさず說明し續ける事が重要な世の中となつた。平成四十五年の危機を乘り切るため、舊暦の關聯業界がどう對應してゆくだらうか。構造が國語國字問題と酷似してゐるため、特に注目する昨今である。

（たかさき いちらう　高崎齒科醫院院長・本會評議員）

鍛冶を「かぢ」と讀むの理

高田　友

表音派は、漢字と假名と一對一を以て對應ぜざれば、全うなる言語表記に非ずと誹謗す。譬へば、「おきのしま」を「隱岐島」と書くは不可なりといふ。「隱」は「お」、「岐」は「き」、「島」は「しま」なれば、「の」はいづくにかある、「の」の字を入れよとの無理難題、かくして、平成大合併にて生じたる「おきのしまちやう」は「隱岐烏町」にはあらで「隱岐の島町」なる不恰好なる表記を正式町名として採用す。已哉。「隱岐の島町」の關係官人、民族の文化を侮蔑したるの廉により、悉皆、囹圄に下さておくべしや。

「紅葉」、「時雨」の如く、漢字の二字熟語を一語の訓にて讀むは、日本人の考案したる見事なる文字文化なり。然るに、心なき人々は、「紅葉」の「紅」は「も」なりや、はたまた「もみ」なりやと愚問を發して已まず。「もみぢ」「しぐれ」は、二つの漢字を併せてかく讀むに到りたるにて、あへて分解して、各々の漢字の讀み如何と穿鑿する心無き什業、悲憤に堪へずとは此の如きを言ふならん。

二字熟語を一語の單語として訓にて讀むは格別の用語の存せざれば、某、試みに《紅葉讀み》と呼ばんことを請ふ。《紅葉讀み》は、「躑躅」「稻荷」「草鞋」等々、枚擧するに遑なし。剩へ、「向日葵」「五月雨」の如く、三字熟語に應用せらるるも尠からず。

漢字文化圈に於て、訓を以て讀むの業に思ひ及びたるは日本人のみなりき。この思惟の才、寔に我が國體の尊嚴四海に光被する所以にあらずや。加之、妖婉妙境に入る《紅葉讀み》を創出したるは、民族の誇らずんばあるべからざる榮譽なるに、毛を吹きて瑕疵を覓むる徒輩の、難解に過ぐれば假名を以て表記すべしとは、洵に與太者の因緣を付くるに異ならず。是、蓋し日本的なるものに悉く嫌惡を示すなり。此の如くんば、詰る所、皇室輕侮の大逆に至り、あたら碩學の徒、三千世界に類なき天津日嗣の御稽たるの大義を滅却して畢んぬべし。

「鍛冶」を「かぢ」と讀むはいかなる理ありてのゆゑなる。「鍛」は音は「たん」、訓は「きたふ」。而して、「冶」の音は「や」（「冶金」を「やきん」と讀むの類）、訓は「とく（熔）」「とかす」「いる（鑄）」。如何に捻らんとも、えやは「かぢ」と讀まん。

豈圖らんや、「鍛冶」を「かぢ」と讀むは《紅葉讀み》な

りき。

「かぢ」の語源は、「金屬を打ち叩く」の意にて、「金打ち」なり。「かねうち(kanecuti)の母音eの脱落して、「かぬち」と變りたり。「わがいも(我妹)」(wagaimo)の第二のaの脱落して「わぎも」を生じたると違ふなく、母音の連續を避けんと欲する上代日本語文法の残滓なり。「かぬち」の撥音便「かんぢ」、さらに轉じて「かぢ」とこそは化したりけれ。

すなはち、漢語の「鍛冶」は、音は「たんや」、訓は「かぢ」にて、「金屬を鍛へて鑄る」の意なり。換言すれば、「鍛冶」を「かぢ」と讀むは、「紅葉」を「もみぢ」、「旅籠」を「はたご」と讀むに均しき二字熟語の訓讀みなるに、即か諒解に苦しむ印象を殘すは、「冶」のニスイをサンズイに換へたる「治」の字音「ち・ぢ」なるによりて、「かぢ」の「ぢ」にあらずやとの錯覺に陥りたればなり。

いにしへより、「鍛冶」を「鍛治」とするの誤記あり。(「鍛」と「鍛」と別字なるに注意せられたまへ)「鍛」の訓は「しころ」にて、兜の後に垂したる布を言ふ。一方、音は旁より察せらるるが如くに「か」なり。「鍛治」なる熟語は存せざれども、「鍛」は「鍛」、「治」は「治」に似たるに據りて、「かぢ」は音讀なりとの俗解生じたり。俗解と言ふ條、洵に理路整然たる混同、怎にして生じたりやを察するの筋道明瞭にして、卻りて言靈の幸ふ國たるの證と見るべきにこそ。

「堪能」は如何。「かんのう」なりや、はたまた「たんのう」なりや。「勘當」「勘忍」などの熟語あれば、「かんのう」ならんかと思はるれど、「たんのう」は化過なりや。

「諸藝に堪能(A)なる經濟學の泰斗、車中、手鏡を以て絶景を堪能(B)せるがゆ系に司直の手を煩はすに至る」

この文に於て、(A)の「堪能」は「かんのう」「たんのう」いづれの讀みも認めらる。然而、(B)の「堪能」は必ず「たんのう」なり。「技藝に優れたり(A)」の意なればいづれも可なれども、「十分に樂しむ(B)」の謂ひならんには、「たんのう」と言はざるべからず。

そもそも、古典漢語にても、或は現代中國語に於ても、「堪能」は、(A)の意のみにして、(B)の如き動詞の用法なし。思ひきや、此の如く動詞たらしむるは、本朝獨自の讀みなりしとは。

然則「國訓ならんや」と問ふ人あり。「かんのう」「たんのう」の音、訓ならんとは思はれじ。その響き、必定「訓」ならずして「音」なるべきにあらずや。而して、本朝獨自の讀みとはこれ如何。

眞を申せば、(B)の意の「たんのう」、その語源は「足りぬ」(「ぬ」は完了)の撥音化したる「たんぬ」にして、「滿ち足りてある」の樣を指す。これによりて、「樂しむ」の意派生して、「絶景を堪能す」とは言へり。

已而、「湛」の字あり。音は「たん」にして、「樂しむ・耽る」の意なり。是を以て此を見れば、「堪」と「湛」とを混同したるに相違なし。「堪能」の音は「かんのう」なれども、「湛能」は「たんのう」なり。奈何せん、漢語に「湛能」なる熟語は存せずして、「堪能」はあり。然は然りながら、「たんぬ」の訛りて、「たんのう」とならんとも、さほど奇矯には思はれず。於是歟、「堪能」に「湛能」の讀みを附するに如かずと横着を決め込みたるならん。「かぬち」「かんぢ」の「かぢ」に轉じたるが如くに「たんぬ」の「たんのう」に轉じたるなり。然後、再三再四混同ありて、(A)の「堪能」にもまた「たんのう」の讀み生じたり。

これ卽ち、《紅葉讀み》に外ならず。《紅葉讀み》は訓なれば、「國訓なりや」の問には「しかり」と答ふるの外なし。

「往時」を「いんじ」と讀むも同斷なり。

「往ぬ」は「去り行く」の謂なり。而して、「往にし世」とは「昔」を指し、また轉じて「いにしへ」といふ。これを訛りて「いんじよ」「いんじへ」の撥音便生じ、さらに、「よ(世)」「へ」の消滅して、「いんじ」の語誕生せり。而して「時」の字音「じ」と「いんじ」の「じ」と同じなるを以て、「往時」は音讀みなるべしと誤解せらるるに至る。眞は「鍛冶」「堪能」の《紅葉讀み》の類なり。

「往時」は「わうじ」なる《音讀み》もあり、「いんじ」と等しく副詞に用ゐらる。いづれも、「往昔」「かつて」「むかし」と置換へて大過なし。

《紅葉讀み》にはあらねども、「杜撰」も味はひ深き言葉なり。これすなはち「粗忽」「そんざい」「投げやり」の意。抑々、「杜」は人の姓にして、唐代に「杜甫」「杜牧」なる詩人あり。宋代の「杜默」なる詩人、押韻・平仄を始め、詩作の定めを疎かにするによりて、嘲笑せられたり。世の人言ひて、「杜の撰じたる詩は重んずるに足らず」と。これによりて、侮蔑的なる意の生じたりき。

「撰」は、「えらぶ」の外に「詩文を作る」を指す。「杜の撰じたる」とは、「えらぴたる」にあらで、「作詩したる」の意なり。奇ッ怪なるは、現代中國語の辭書を按ずるに、「撰」は「詩文を作る」とのみありて、「えらぶ」を記すことなし。

「杜」の字は、《漢音》「と」、《呉音》「ど・づ」。

「撰」は、《漢音》「さん・せん」。《呉音》は「ぜん」。

本朝にては、《漢音》と《呉音》の分別に混亂ありて、「づさん」と讀むに至れり。

周末の蜀に「杜宇」なる王ありき。この人死して後、その魂、化してホトトギスとなる。これによりて、ホトトギスを「杜宇」「杜魂」「杜魄」「杜鵑（とけん）」と記す。

新古今和歌集にては、「ホトトギス」は必ず「郭公」の字を用ゐて表はす。「郭公」は「かくこう（カッコウ）」ならずやと訝りたまふらめど、「かくこう」(cuckoo)と「ほととぎす」(little cuckoo)は近縁の鳥なれば、敢へて字を借りたるならん。なほ、英語の cuckoo は日本語若くは中國語より入りたるにはあらで、英語獨自の擬音語なり。

「不如歸」の字を用ゐるもあり。その鳴聲、「不如歸去」といふに似たるがゆゑなりとぞ傳へらるる。現代北京語にては burugiuqu（ブールーグエチー）なれども、中國語の發音は時代・地域により懸隔甚だしければ、いかなる發音を寫したりやは定かならず。

「不如歸去」を訓ずれば、「歸り去るに如かず」。さらでだに心寂しき旅人の、ホトトギスの聲を聞けば望郷の念に堪へざるに由りて、この語の出來したるにあらずやと、これは我が詮なき想像なり。

ホトトギスに「時鳥」を宛つるは、本朝にて生れたる《國訓》且つ《紅葉讀み》なり。因みに「閑古鳥」もカッコウ、ホトトギスの異名に外ならず。

ホトトギスは、本朝の人の心には、橘の花の聯想あり。和泉式部の敦道親王を籠絡し奉りたる歌「薫る香に袖ふるよりは時鳥聞かばや同じ聲やしたると」は、親王の橘の枝を持ち來たり給へるに由りて、浮女の徒心を發したるなり。げに「平安の小保方」の名に愧づるなし。なほ、この歌、「同じ聲」は「同じき聲」とすべかりしものをと訝る人多かれど、形容詞「同じ」の名詞の前に附きて修飾するには、「同じき」に非ずして「同じ」を用ゐること多く、連體形の二つありと承知すべし。

震旦(China)にては、ホトトギスの聯想せしむる花は「皐月」なり。しかうして、「杜鵑」はホトトギスのみならず、「皐月」の花を指して言ふもあり。

さらでだに心寂しき旅人の
　あはれを誘ふ杜鵑かな
くれなゐの杜鵑や匂ふをぼの君
　今いづくにかおはしますらむ

（たかだ　いう　本會會員）

奈良の旅

安東路翠

木村清孝先生と行く奈良の旅

師の講義夜更けの會に始まれり佛の里の揺るぎなき旅
寧樂路にて八十の衢に立たれ居し懐かしき神に遭はんとぞ念ふ

興福寺

夏草と猿澤の池懐かしみ塔の言傳て愛しみゆく
天平の散華麗し一ひらとなりて舞ひ來ぬ旅人の徑
絢爛の不空羂索觀音の垂れし五色の色に繋がり
彷彿と宵に浮かびし勸進能天人も交ふ芝の上の舞
天平の阿修羅の像の眩惑と八十の憂ひをあかず眺めり
堂守りの觸れ給ひけんうつつなか阿修羅の像の細き溫もり
古き書の匂ひの如く惹かれたる五重の塔の木目の紋様
佛頭の稻藁の中に埋もれし爽やけし眸の光ますぐに

東大寺

大寺は毘盧遮那佛のましませば梵鐘響き出雲は守る
嚴しかる御佛に遭ひ思ひ究め苦しくあらば呻く觸れかし
嚴然と御佛語り綴け來ぬ心の疎む言多かれど
いかにしや金人の庫の藏書なり努めてみむも胸の高鳴り
觀音の眸の先に如何なるか見ましけん思惟の御佛
拜觀の經に藏書に一瞬は永遠なると華嚴のみをしへ
新緑に黄落もあり奈良の夏吾が戀ふ鹿は幾歳にならん

春日大社

平成に若返りたる松の苔遠き人社の古事垂れ來たる
影向の松の木末に天地の言葉の謂れ語り會へるも
縹緲と神殿の域水の面は祭の後か闇に靜けき
たまゆらに異國の空に繋がれり薔薇を咲かせし古代の彩畫
拜殿におろがむ神威雲隱る氏と御神の御影ひしめく
炎熱の萬燈籠を禮しゆく砂利踏音を御杜にとどめて

正倉院

廣やかに境内に生ふ芝草に息吹留めん御代の御物と
賣物に寄せし女院の心映え絢爛の華揃ひ咲くまで
あをによし寧樂の朱雀は吹く風に平成の御代たたえ居る

らん
悉く古き御寺は槌の音に包まれ給ふ花のさかりに

藥師寺

松籟へ新し塔の並び立つ睦まむ君の悲願麗し
おほてらの藥師の尊き丸き肩俗世の魂抱きくるらん
完成の御佛の笑み情を超ゆ宇宙の深みかくのごとくか
了んぬか佛師は消えしかの笑みの永久のはたらき顯はせし後
金堂の藥師如來の尊かる呼應の息を人は知らずや
青空の水煙に舞ふ天人の笛の音響く今の代にして
兩塔の並びし松の風の下おはしましけり天武の貴
蓮の苑御堂整ひ平らかに藥師三尊おはしましけり
萬葉の詞懷かしみ語り合ひ藥師の庭に詠ひ行きけり
御庭に紫式部咲きにけり夏の霧間の清しさをゆく
萩の風母の忌日に御藥師はあはれ溫もりあらはし給ふ

三輪山

まほろばの雨雲の下和魂はいはれ盡さむ神の眞書に
磐座の奥に坐します御神と老樹の下に潜みし白蛇
磐座の神の繁みは蛇の栖大蜻蛉はかくやに護る
大王の御末を祀り崇ばる國立たしけん遠き世の神
驟雨霽れ三輪の御祝いでまさむ御酒の並びし杉玉の廊
篝火の光つなげし演目の三輪明神に風吹きつける
三輪山の神々しかる雪の景曆の繪さへただに聖しき

法隆寺

斑鳩の太子の御影浮かび來ぬ思ひは深し無漏の御心
觀音は尊き御貌の陰翳に慈も悲も恤も收め祕めたる
敦煌を偲ぶ淨土變相圖寺相整ふ日出づる寺に
斑鳩の土塀に鎭む聖域の眞の思ひ賜るタベ
八角の殿振り返り薄明に穢しの御影想ひ偲びつ
薄闇に百濟觀音立ち給ふ斑鳩か激しく高みに鳴けり

夢殿

曼荼羅に刻み込まれし金の絲幾多の文字も越えし語りを
揚羽蝶翔びて舞へれば天平の緞帳に編む模樣となれり
齋はれし日女の啓示を受けしなり金朱の線の細やかにして
夢殿の觀音菩薩の御みかほ靜けく變はる慈悲に叡智に

淨瑠璃寺

九體の阿彌陀御堂の扉を開けて蓮池を歩みタ陽射し來ぬ
靜寂の池を巡りて師の御聲檜皮葺なる三重塔に
金色の阿彌陀淨土を顯せる御堂をたたへ合はす掌ならむ
阿彌陀寺に合掌の衆池の邊の細き露草風は撫でゐて

岩船寺

門前に石佛おはし夕暮れて柿の實なるか音ひそめ落つ
ときめきは常に變はらじ久方の三重塔の玲瓏の景
升し行く阿彌陀如來の御尊影偏袒右肩の御僧と共に
谷底の山の鶯笹風に歌止まざりし岩船の道
山法師の荒行なるや若竹を切りまくりたり太刀も鋭く

高松塚古墳

圓墳は小雨に濡れて若草のこまやかに生ひ鎭め覆へり
石槨の四神星宿陵は永泰公主の壁に倣ふや
出でませる壁畫の女人彩帶びて歩を進めゆく絡の持物と
高松の隱りの陵に豐かにも廣げられたる佛師の想ひ
尋ね來て青磁色なり堂の月南都の御寺爽やに更けゆく
神さぶる山邊に月の登り來て青衣の女人月宮殿に

（あんどう　ろすい　日本畫家、本會常任理事）

後書

いつもながら、素晴しい講師の話に、聽衆のもつと多ければの嘆きです。小川榮太郎氏は、現在最右翼の若手の評論家として期待されてをり、御本人はもつと文藝への傾注をと望みながらも、現在の政治狀況に危機を感じ、日本の現實社會の只中で將來のための行動を起してゐます。この八月には正字正假名の評論集『小林秀雄の後の二十一章』を、ベストセラー作りのうまい氣骨の幻冬社より出版し話題となつてゐます。裝丁の材質にも凝つた本で、五㎝もあらうかといふ厚みがあるにもかかはらず手にして重さを感じず、讀むときも内容の硬骨に對し版組がよいのか活字が目に優しく入つてきます。人に御奬めする所以です。

今一人の講師竹本忠雄氏は、佛蘭西とのかかはりが深く、佛蘭西文化省(日本では曖でしかない文化の役所)の大臣、アンドレ・マルローと親交があり、那智の滝や伊勢神宮に案内して、日本の靈性を感得させたといふ功績をあげてゐます。美智子皇后陛下の典雅でありながら國や國民を思ひやる御歌に觸發されて佛譯、それが歐州、アフリカの人々の共感を呼び、感激させたと聞いてゐます。上の寫眞は、竹本、小川兩講師との親睦會のものです。尼崎に「契沖研究會」といふ契沖の出身地にあやかつてできた市民運動の團體があります。その主催する契沖顕彰短歌會は小中學の生徒にも呼びかけたため、今や學童の短歌應募が一萬首を越えるほどの盛況を呈してをり、契沖の名を小さい子供達に知らしめる效果をあげてゐます。今年の二月に發表された學童短歌を吉原榮德會長が講評されたので、本誌に載せてもらふことにしました。老年の者にも今どきの學童の生活ぶりや考へ方が垣間見えます。

(事務局長　谷田貝常夫)

「國語國字」編輯委員　市川浩
　　高田友
　　中井茂雄
　　谷田貝常夫

平成二十七年十一月一日　發行
創刊　昭和三十五年十二月一日(通巻　二〇四號)

編輯・發行　國語問題協議會

東京都大田區久が原三丁目二十四の六
郵便番號　一四六―〇〇八五
電　話　〇八〇―三四一一―五五〇一
電　寫　〇三―三七五三―一四二九
電　郵　yatagait@f03.itscom.net
URL:http://kokugomondaikyo.net